

福岡市

羽根戸古墳群

— 西区西部墓園建設とともに調査(2) —

羽根戸古墳群 E 群の調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集

1989

福岡市教育委員会

羽根戸古墳群 (198集) 正誤表

ページ	行	誤	正
14	5	N-83° -W	N-83° -E
17	13	全壁高	前壁高
Fig 20		方位が南北逆方向	
25	18	N-87° -E	N-87° -W
26	1	石側壁	右側壁
30	19	N-72° -W	N-72° -E
36	13	金箱	金棺
47	11	内部には毛根の…	内部には植物の毛根の…
48	9	(中宮1号.上總金鈴塚例)	(中宮1号.6世紀前半)
48	11	6世紀以降	6世紀中頃以降
48. 地名表 (日本)	No.13	ハマグリ.サソリガイ	オキシジミ.レイシ
49. 地名表 (韓国)	No.20	慶北.達西面	大邱市
50. 文獻 (日本)	No.20	上田沖	上田三平
50. 文獻 (韓国)	No.1	周辺石櫛墓	周辺石櫛墓

福岡市

羽根戸古墳群



遺跡略号 HDK-E

調査調査番号 8746

1989

福岡市教育委員会

序 文

近年、福岡市域と周辺地域では、都市化にともなう人口の増加が著しく、このための諸開発によって、市域に数多く分布する古来の遺跡に対しても、影響がでてきています。

福岡市教育委員会では、このような開発によって失われる遺跡の保存調査に努めているところであります。

今回の調査は、西区西部墓園建設地内にある古墳群が対象となりました。幸い、関係各位の御尽力により、墓園内に整備保存されることになりました。将来、雲峰飯盛山の麓に眠る古代人と現代人の魂が安らかに邂逅し、また訪れる人達の心を和らげてくれることを願ってやみません。

調査に際しましては、関係各位に御協力を頂き、多くの成果を得ることができました。本市文化財に対する皆様の御理解に、深く感謝いたします。

平成元年 3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

- 1 本書は福岡市教育委員会が、市営西部墓園建設にともなって、1987年12月～1988年3月におこなった羽根戸古墳群E群の調査報告書である。
- 2 遺構の実測は、横山邦繼・宮井善朗・大橋隆司・長家伸・中村真由美があたり、松尾和浩・大岡弘明・尾崎利一の協力を得た。
- 3 遺物の実測は、宮井・長家・大橋が行なった。
- 4 遺構の写真撮影は横山が行った。また遺物の写真撮影は宮井が行なった。
- 5 遺構　遺物の製図は宮井・大橋が行ない、高橋健治・吉村知子が補助した。
- 6 本書の執筆は、宮井が行なった。また8号墳出土の須恵器内の魚骨について、佐賀大学講師木村幾多郎氏より玉稿を頂いた。記して感謝申し上げます。
- 7 本書の編集は、横山・宮井協議のうえ宮井がこれにあたった。
- 8 本報告書に収録した遺物および記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（博多区井相田二丁目）に収蔵、保管されるので活用されたい。

本文目次

I	はじめに	1
II	遺跡の立地と環境	3
III	調査の記録	7
1.	第1号古墳	8
2.	第2号古墳	13
3.	第3号古墳	17
4.	第4号古墳	22
5.	第5号古墳	23
6.	第6号古墳	25
7.	第7号古墳	27
8.	第8号古墳	30
IV	小結	43

付編 8号墳羨道内出土土器内より検出された魚骨について

佐賀大学非常勤講師 木村幾多郎

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1:50,000)	4
Fig. 2	遺跡位置図 (1:40,000)	5
Fig. 3	羽根戸古墳群E群現況測量図 (1:300) (折り込み)	
Fig. 4	1号墳石室実測図 (1:50) (折り込み)	
Fig. 5	1号墳出土遺物実測図 (1) (1:3)	10
Fig. 6	1号墳出土遺物実測図 (2) (1:3)	11
Fig. 7	1号墳出土遺物実測図 (3) (1:2)	12
Fig. 8	1号墳出土遺物実測図 (4) (1:1)	13
Fig. 9	2号墳石室実測図 (1:50) (折り込み)	
Fig. 10	2号墳出土遺物実測図 (1) (1:3)	15
Fig. 11	2号墳出土遺物実測図 (2) (1:2)	16
Fig. 12	2号墳出土遺物実測図 (3) (1:1)	17
Fig. 13	3号墳石室実測図 (1:50) (折り込み)	
Fig. 14	3号墳遺物出土状況図 (1:20)	19
Fig. 15	3号墳出土遺物実測図 (1) (1:3)	20
Fig. 16	3号墳出土遺物実測図 (2) (1:2)	21
Fig. 17	3号墳出土遺物実測図 (3) (1:1)	22
Fig. 18	4号墳石室実測図 (1:50) (折り込み)	
Fig. 19	5号墳出土遺物実測図 (1) (1:3)	24
Fig. 20	5号墳石室実測図 (1:50) (折り込み)	
Fig. 21	5号墳出土遺物実測図 (2) (1:2)	25
Fig. 22	5号墳出土遺物実測図 (3) (1:1)	25
Fig. 23	6号墳石室実測図 (1:50) (折り込み)	
Fig. 24	6号墳出土遺物実測図 (1:3)	27
Fig. 25	7号墳石室実測図 (1:50) (折り込み)	
Fig. 26	7号墳出土遺物実測図 (1) (1:3)	29
Fig. 27	7号墳出土遺物実測図 (2) (1:1)	30
Fig. 28	8号墳石室実測図 (1:50) (折り込み)	
Fig. 29	8号墳羨道部遺物出土状況 (1:20)	31
Fig. 30	8号墳羨道出土遺物実測図 (1) (1:3)	33
Fig. 31	8号墳羨道出土遺物実測図 (2) (1:3)	34

Fig. 32	8号墳羨道出土遺物実測図（3）（1：2）	35
Fig. 33	8号墳羨道出土遺物実測図（4）（1：1）	36
Fig. 34	8号墳墓道出土状況（1：20）	37
Fig. 35	8号墳墓道出土遺物実測図（1）（1：3）	38
Fig. 36	8号墳墓道出土遺物実測図（2）（1：3）	39
Fig. 37	8号墳墓道出土遺物実測図（3）（1：3）	41
Fig. 38	8号墳墓道出土遺物実測図（4）（1：1）	42
Fig. 39	8号墳墓道出土遺物実測図（5）（1：3）（折り込み）	
Fig. 40	羽根戸古墳群E群平面図集成（1：100）	45
Fig. 41	8号墳出土魚骨	50

図版目次

- PL. 1 1. 1号墳全景（東から）
2. 1号墳羨道（東から）
- PL. 2 1. 1号墳石室前壁
2. 1号墳石室玄門
- PL. 3 1. 1号墳右側壁
2. 1号墳奥壁
- PL. 4 1. 2号墳全景（西から）
2. 2号墳床面（東から）
- PL. 5 1. 2号墳奥壁
2. 2号墳羨道遺物出土状態（北から）
- PL. 6 1. 3号墳石室前壁
2. 3号墳石室玄門
- PL. 7 1. 3号墳石室奥壁
2. 3号墳石室奥壁
- PL. 8 1. 3号墳閉塞部（北から）
2. 3号墳墓道部遺物出土状態（北から）
- PL. 9 1. 4号墳全景（西から）
2. 4号墳石室奥壁
- PL. 10 1. 4号墳石室（西から）
2. 5号墳石室奥壁
- PL. 11 1. 5号墳全景（西から）
2. 5号墳閉塞部（北から）
- PL. 12 1. 5号墳石室前壁
2. 5号墳石室玄門
- PL. 13 1. 6号墳全景
2. 6号墳石室玄門
- PL. 14 1. 6号墳石室奥壁
2. 7号墳全景
- PL. 15 1. 7号墳石室前壁
2. 7号墳石室玄門

- PL. 16 1. 7号墳石室奥壁
2. 7号墳石室奥壁
- PL. 17 1. 8号墳石室前壁
2. 8号墳石室玄門
- PL. 18 1. 8号墳石室奥壁
2. 8号墳石室奥壁
- PL. 19 1. 8号墳羨道部遺物出土状態（西から）
2. 8号墳羨道部遺物出土状態（南から）
- PL. 20 1. 9号墳全景（西から）
2. 9号墳石室（西から）
- PL. 21 1. 12号墳石室現状（東から）
2. 羽根戸古墳E群遠景（北から）
- PL. 22 1. 1号墳出土土器
- PL. 23 1～3号墳出土土器
- PL. 24 3～6号墳出土土器
- PL. 25 7号墳出土土器
- PL. 26 8号墳出土土器（1）
- PL. 27 8号墳出土土器（2）
- PL. 28 8号墳出土土器（3）
- PL. 29 1号墳出土鉄器
- PL. 30 2、5号墳出土鉄器
- PL. 31 3号墳出土鉄器
- PL. 32 8号墳出土鉄器
- PL. 33 各古墳出土装身具類

I. はじめに

1. 調査に至る経過

昭和60年、西区大字羽根戸に計画された「西部墓園」建設が具体化し、担当の都市計画局（現都市整備局）公園建設課より、事業計画とともに、事業地内における埋蔵文化財の有無および工事による影響についての調査依頼が、埋蔵文化財課に出された。

事業は墓園本体と、進入道路の拡幅工事がその主なものである。進入道路については、保存が困難な状況であり、道路部分にかかる羽根戸原C遺跡・防災工事の法面調整にかかる羽根戸古墳群N群は、記録保存の措置がとられた。調査は1985年5月から1986年6月にかけて行われ、その成果は、昨年度に報告書が公刊されている。（「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第180集）

墓園本体部分では、対象地内に、羽根戸古墳群E群が分布していることから、建設区域から、はずよう協議がなされた。その結果、設計変更によって古墳を現状保存し将来的には、墓園の緑地部分にとり込む形で整備するということで合意がなされた。これを承けて、基準資料を得るための調査を行うことになり、1987年12月17日から調査を開始した。

発掘調査にあたっては、担当課である公園建設課井上氏、工事施行の西鉄グリーン株式会社には、調査中数々の御協力を賜った。記して感謝する次第である。

遺跡調査番号	8746	遺跡略号	HDK-E
調査地地籍	西区大字羽根戸	分布地図番号	叶岳 105
調査面積	古墳 9 基	調査対象面積	古墳 9 基
調査機関	1987年12月17日～1988年3月30日	調査実施面積	古墳 8 基
		事前審査番号	62-373

事業主体 福岡市都市整備局公園建設課

調査期間 1987年12月17日～1988年3月30日

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第1係長 折尾学

庶務担当 岸田隆

調査担当 横山邦継 宮井善朗

また発掘調査および、これにつづく整理作業においては、以下の方々の御協力をいただいた。
(敬称略)

調査補助 大橋降司 長家伸（九州大学）

発掘調査 尾崎利一 廣瀬梓 松尾和浩 大岡弘明 因ヨシ子 井上ムツ子 井上清子
井上磨智子 井上ヒデ子 井上カヅ子 井上トミ子 倉光アヤ子 倉光京子 倉光千鶴子 倉
光信子 小柳和子 斎藤国子 佐藤みづほ 清末シヅエ 富永ミツ子 富崎栄子 徳永ますみ
水井鈴子 西山秀子 柳浦八重子 結城千代子 横溝千江子 横溝恵美子 横溝カヨ子 中村
真由美

整理作業 太田賴子 西原由規子 飯田千恵子 浜野年代 小森佐和子 土斐崎つや子 倉
吉立子 吉村知子 井上靖崇 井上絹子

II. 遺跡の立地と歴史的環境

羽根戸古墳群の位置する早良平野は、福岡市の中心部を占める福岡平野の西側に位置している。東側は、油山山塊と、それから北へ派生する鴻ノ巣山丘陵、油山北台地が海岸付近までのび、福岡平野との境界を画している。西側は、背振山系から派生して金山、飯盛山、叶岳、長垂山に至る各山塊によって糸島平野と画されている。平野の中央部を室見川が貫流する。各時代の遺跡は、平野縁辺部、中央部に残存する低、中位段丘や、海岸部の砂丘地域を中心に分布している。ここでは古墳時代を中心に、早良平野の遺跡について概観していく。

古墳出現期～前期

古墳出現期前後の埋葬遺跡として、宮ノ前遺跡、野方中原遺跡、五島山古墳、藤崎遺跡、重留遺跡、飯盛谷遺跡等があげられる。

宮の前遺跡は、弥生時代終末期の墳丘墓で近年では前方後方形の可能性も指摘されている。3基の箱式石棺が存在し、突出した勢力をもった特定近親者集団の墓と見られている。野方中原遺跡の墓地は、弥生時代終末から古墳時代の初頭にかけての石棺墓で構成されている。1号石棺墓、3号石棺墓からは、後漢鏡が出土している。重留遺跡では、箱式石棺より鳥文鏡が出土している。

これら在地色のつよい墳墓に対して、畿内を初めとした外来色の強い墳墓もまた、出現している。藤崎遺跡は、方形周溝墓を主体とした埋葬遺跡で、6号周溝墓からは三角縁二神二車馬鏡が出土している。また過去にも、箱式石棺墓より三角縁二神龍虎鏡、方格渦文鏡が発見されたり、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての大墓地であることが知られている。また、飯盛谷遺跡でも、方形周溝墓群が検出され、後漢鏡、石鏡が発見されている。また、五島山古墳は、独立丘陵上に営まれた箱式石棺墓群で、斜縁神獸鏡2面、銅鏡、鐵劍等が出土している。この時期の墳墓のあり方を見ると、副葬品（特に鏡）をもつ墓は、ほぼ旧郷程度の範囲を一単位として分布する。これは、弥生時代遺跡のまとまりともほぼ一致する。また、いわゆる畿内型の古墳は、樋井川流域の京ノ隈古墳以外には見当らない。西新町、藤崎のように、多量の外来系土器が流入し、墓制もドラスティックに変化する所もあるが、ほとんどは、在来の伝統を強くひきずって、ゆるやかに古墳時代へ移っていたようである。

中期

中期に入ると、早良平野にも定形化した古墳が造営される。拝塚古墳（重留1号墳）は全長70mの前方後円墳で、墳丘の周囲に一重の周溝をめぐらす。墳丘には葺石をめぐらせ、円筒埴輪、形象埴輪が並べられていたと考えられる。4世紀末から5世紀初頭の築造と考えられている。すぐ西側に方墳とされる重留2号墳がある。



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 羽根戸古墳群（アミ部＝E群） | 13 桶渡 2号墳 |
| 2 西新町遺跡 | 14 古武遺跡群 |
| 3 藤崎遺跡 | 15 金武古墳群吉武支群 |
| 4 五島山古墳群 | 16 金武古墳群乙石支群 |
| 5 有田遺跡群 | 17 免遺跡群 |
| 6 湯納遺跡 | 18 拝塚古墳（重留 1号墳） |
| 7 宮の前遺跡 | 19 重留 2号墳 |
| 8 野方中原遺跡 | 20 重留遺跡群 |
| 9 野方古墳群 | 21 重留古墳群 |
| 10 羽根古南古墳群 | |
| 11 須盛谷遺跡 | |
| 12 桶渡古墳 | |



Fig. 2 遺跡位置図 (1 : 40,000)

樋渡古墳は全長40mの帆立貝形の古墳である。墳丘の周囲に一重の周溝がめぐる。墳丘には葺石をめぐらせ、円筒埴輪が並べられている。主体部は、堅穴系横口式石室と推定されている。5世紀前半から中頃の築造と考えられている。この周辺では、樋渡2号墳（方墳、5世紀後半）、樋渡3・4号墳（円墳 5世紀末）と後続する。

この他に、中期古墳に属するものに 吉武古墳群があげられる。10数基からなる円墳群で主体部は、堅穴系横口式石室と考えられる。陶質土器、初期須恵器を多数出土した。5世紀末と考えられている。この時期の古墳のあり方を見ると、前代に各地域に出現した有力者層が、次第に収束され、早良平野全体を総括する首長の墓として、拝塚古墳の出現を見たと考えることができよう。しかし、首長墓級の大規模古墳は、樋渡古墳以後は継続せず、小規模の群集墳を形成する。従って首長権を支える基盤は脆弱で、構成員に対する規制力も弱かったものと考えられる。

後期

後期には、平野縁辺部の丘陵を中心に群集墳が多く形成される。6世紀前半から中頃、羽根戸古墳群、羽根戸南古墳群で点々と築造がはじまり、6世紀後半でピークを迎える。羽根戸古墳群をはじめとする飯盛山麓でも、金武古墳群（147基）、羽根戸南古墳群（20基）、羽根戸古墳群（143基）、野方古墳群（18基）と、多数の古墳が築造されている。

羽根戸古墳群は、飯盛山塊から北東に派生して、舌状にのびる丘陵群の南北向斜面に分布する。A～P群の16支群に分けられている。石室規模が群を抜いて大きいのはH群の3基である。E群は北端部のA群、B群、C群から、谷を隔てた北向きの斜面上に位置する。

生活、生産遺構

早良平野の生活、生産関係の遺構は調査例が多くない。前期では、西新町、野方中原、湯納遺跡等があげられる。また、有田遺跡は、前期から後期にわたって集落が営まれている。中期では、吉武遺跡群で、掘立柱建物、堅穴式住居が多数検出されている。また生産遺跡では、原深町、鶴町遺跡等で前期の水利施設、重留遺跡では6世紀初頭の須恵器窯が調査されている。



Fig.3 羽根戸古墳群 E 群現況測量図 (1:300)

III. 調査の記録

調査の概要 羽根戸古墳群E群は、西部墓園内に保存して、整備し、古墳群を身近に見ることができる遺跡公園として活用されることになる。今回の調査は、そのために必要な基本資料を得ることが目的である。その目的を達するために、以下のような方針で調査を行った。

・正確な地形測量図の作成（1:200）

・石室内に崩落した土砂や岩を取り除き、古墳が使われていた時の面（のうち最も上層にある面）を検出す。また上記の面での、石室の実測図を作成する。調査後は、将来の整備にそなえ、現状以上に崩壊しないような保存措置を行う。

この結果、石室に溜まった埋土を取り除くための、必要最少限のトレーニング以外は、ほとんど表面調査に近い調査となつたが、思いのほか、豊富で興味深い成果を得ることができた。

羽根戸古墳群E群は、福岡市文化財地図によると、14基の古墳からなる。そのうち、9、10、11号墳は、砂防ダム建設に伴って、福岡県教育委員会による調査が行われている。今回の調査^{註1)}は1～9号墳が対象で、既に調査されている9号墳を除く1～8号墳を調査した。

古墳群は、標高100m～110mの西から東に述べる尾根の北斜面に位置している。各古墳の墳丘はすべて円墳である。石室はすべて単室で両袖型の横穴式石室である。石室の方向は、1号墳が東向きである他は、すべて西に開口している。以下、簡単に各古墳について述べていこう。（Fig.3）

1号墳は、もっとも谷奥にある。石室は長い羨道部をもつ。石室、羨道の埋土から、須恵器、鉄器、玉類が出土した。

2号墳は、1号墳のすぐ西側にある。天井石が、石室内に大きく崩れ落ちている。羨道部で、二面の埋葬面を確認した。土師器、須恵器、鉄器、耳環、銀環などが出土した。

3号墳は閉塞施設がよく残っており、石室内に入るのに苦労した。羨道部から鉄渟が出土している。4号墳も、天井部や、側壁の一部を失っている。5号墳は、4号墳から25m程離れた東側に位置している。石室は谷側に若干傾いている。6号墳も天井を失う。埋土から須恵器が出土した。7号墳は6号墳から東へ30m程離れている。埋土から須恵器、土師器が出土した。

8号墳は7号墳の北側にある。羨道から破碎土器が、羨道から完存土器がまとめて出土した。完存の壺の中には、魚の切身や、鉄器が収められていた。

1. 第1号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3、PL.1-1)

1号墳は、谷筋の最も奥まった所にある。古墳群中最も高い所であり、墳頂を112mの等高線がめぐる。現状では、墳丘径9.5mを測るが、南側は、尾根からの流上でかなり埋め立てられているのではないだろうか。墳裾からの比高差は、北側の最も落差のある所で、2.75mである。

(2) 石室 (Fig.4、PL.1-3)

石室は、単室で両袖型の横穴式石室である。主軸をN-66°-Eにとる。1号墳の石室のみが東側に向かって開口している。

玄室は、ほぼ正方形である。玄室の規模は、奥壁幅2.0m、右側壁幅2.0m、左側壁幅1.85m、天井までの高さ2.5m、前壁高1.2mである。前壁が高いのが特徴であろう。玄室内は過去の盗掘をうけており、敷石が半分位抜きとられている。

奥壁は、三角形の石と、その半分位の石を腰石に据え、その小さい方の石の上と、三角形の石と右側壁との間に、それぞれ3段づつ積み、高さを合わせた上に2段積み、その上から持ち送って天井に至る。持ち送りのはじまる高さは、樋石の高さにはほぼ近い。全体的に横に目地を通した。煉瓦積みの手法がうかがえる。

右側壁は、長方形の大ぶりの転石と半たい小ぶりの転石2個を腰石とし、このすぐ上から持ち送って天井に到る。左側壁もほぼ同様で、腰石2個のすぐ上から持ち送る。したがって玄室の横断面は「い」の字形になる。側壁は、縦に目地が通る重箱積みの手法がうかがえる。

玄門は、ほぼ同じ高さの転石2個を袖石にして、その上に2段積んで樋石を架けている。樋石から樋石までの高さは1.15mである。前壁は、樋石の上からほぼ直に立ちあがり、上から2段目から持ち送って天井に至る。

敷石は約半分が遺存している。右袖石付近の敷石の上から、赤焼きの須恵器壺身が、伏せた状態で出土した。

羨道部は樋石から測って3.8mでやや長めである。羨道幅は、玄門部で0.6m、閉塞部で0.75m、開口部で0.9mである。羨道のほぼ中央部（樋石から2m）に、比較的大きめの石をおいているが、これが、閉塞施設の根石と考えられる。閉塞内左側壁付近で完形の須恵器壺身が出土した。これは原位置に近いものと考える。閉塞外には転石の集積が見られるが、閉塞施設の崩落した名残りではないかと考えられる。

羨道部の壁面は、玄室に比べると雑な積み方をしている。閉塞内はやや大ぶりの、閉塞外はやや小ぶりの転石を雜然と積みあげている。羨道部の天井は樋石を含めて2枚の石を架け、構築している。羨道部左側壁は開口部から、若干南方へ回り込んでいくような状態を示しており、外護列石と接続する可能性もあるが、未掘のため確認はしていない。

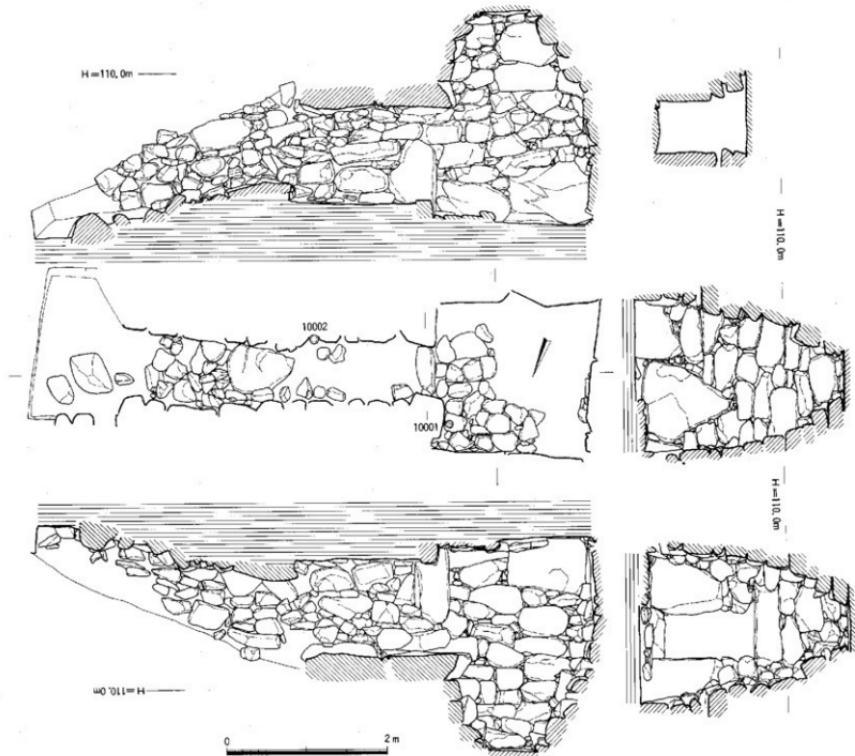


Fig. 4 1号墳石室実測図 (1 : 50)

(3) 出土遺物

① 土器 (Fig.5.6、PL.22-23)

古墳群全体を通じて、最も多く出土しているのは須恵器で、その中でも壺蓋、壺身の出土が多い。従って簡潔な記述を行うために、ある程度類別しておく必要があろう。そこで、以下の記述では、壺蓋、壺身を以下のように大別する。

壺蓋Ⅰ類 口縁部と天井部の境が、段や沈線で、比較的明瞭に区別される。口縁内側にも段がつく。**壺蓋Ⅱ類** 区別が不明瞭または区別がなくなる。**壺蓋Ⅲ類** 内面にかえりをもつ。**壺蓋Ⅳ類** 天井につまみをもつ。

壺身Ⅰ類 受部をもつもの。**壺身Ⅱ類** 受部をもたず、平底のもの。**壺身Ⅲ類** 高台をもつもの。なお、細別は、遺物の各説の際に行うことにしておきたい。

壺蓋 1号墳出土の壺蓋はⅡ類がほとんどで、破片で一点Ⅲ類(10019)が出土している。10007は、口径が大きく、口縁内面に段がつくが、すでに、天井部と口縁部の境界は不明瞭である。Ⅰ類の形制をひくもので、これをⅡa類とする。10023、012、005、011、025は、やや口径を減じる。天井は丸みを帯びて、口縁部との境界は消失する。回転ヘラ削りは多くは外面の3分の1程度の範囲に施される。これらをⅡb類とする。005は、ヘラ削りによる棱線のはじまる位置は高いが、下半をややナデ消されており、砂粒の動きをみれば、ヘラ削り自体は若干下まで施されている。10004、009、006、014、015は、更に径が小さくなり、11~13cmになる。回転ヘラ削りは天井付近に施されるのみで、その結果、天井が平坦になっているものが多い。これをⅡc類とする。Ⅱc類は、口縁部で屈曲している例が多い。009、006、015はその例である。004、014は更に口唇部でわずかに屈曲して外反する。

壺身 1号墳出土の壺身は、すべてⅠ類である。

10024は、かえりの立ち上がりが、直に近く高い。受部径14.0cmで、大ぶりである。稜線として表われていないが、ヘラ削りは、外面3分の1程度まで施されている。これをⅠa類とする。10022、013は、Ⅰa類に比べて、立ち上がりが低くなり、内傾する。これをⅠb類とする。ヘラ削りはいずれも外面の3分の1程度まで施されている。10014は、Ⅰb類とするには、立ち上がりが低く、内傾の度がきついが、外面のヘラ削りが底部から3分の1以上施されていることや、底部が平坦になっていないことなどから、Ⅰb類に含めておく。10001、002、003は、かえりの立ち上がりが、更に短く内傾し、小形化する。受部は、外方へ水平に突出するものが多い。受部径で12~13cmである。これをⅠc類とする。ヘラ削りは、底部付近にのみ施され、その結果、底部が平坦となる。10001は、玄室右袖近くの敷石上に伏せられていたものである。焼成が悪く、還元しきれずに、内面は明赤褐色をしている。底部は、ヘラ切りの後、雑なナデを加えている。10003も、焼成、調整が001に酷似する。また、底面に同一のヘラ記号が記されており、同一焼成時の一単位中の2個であった可能性が高いと考えられる。また、ヘラ記号の各辺の切り合いは同じで、同一

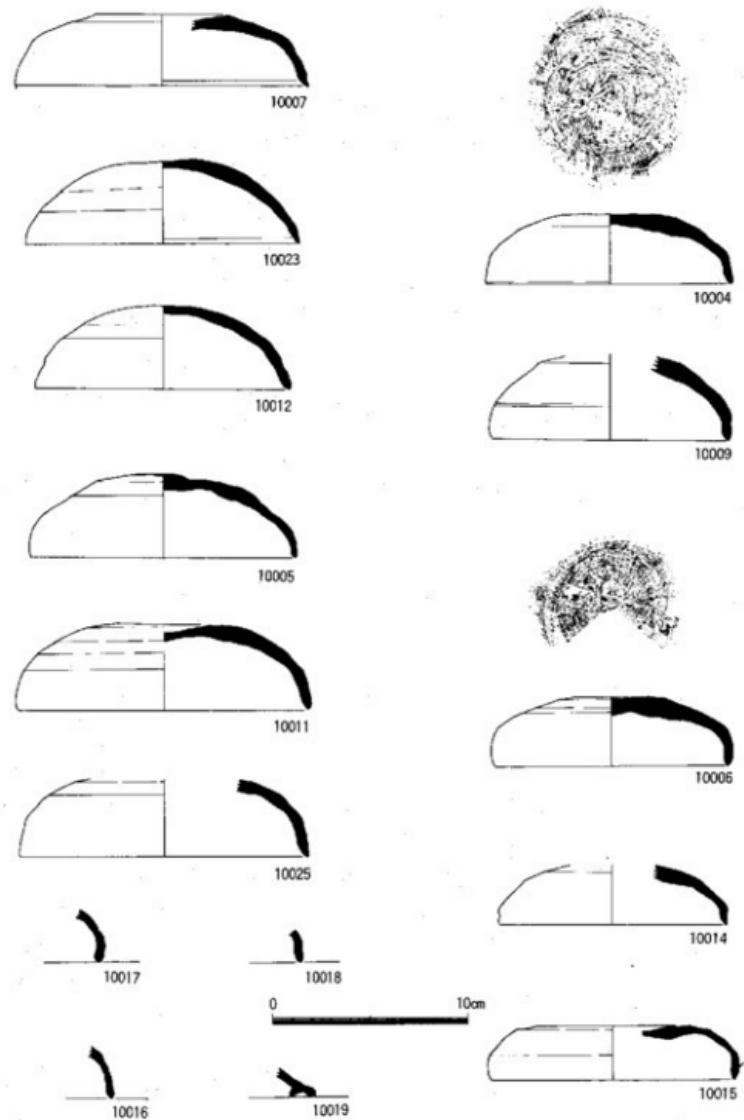


Fig. 5 1号填出土渣物实测图 (1) (1:3)

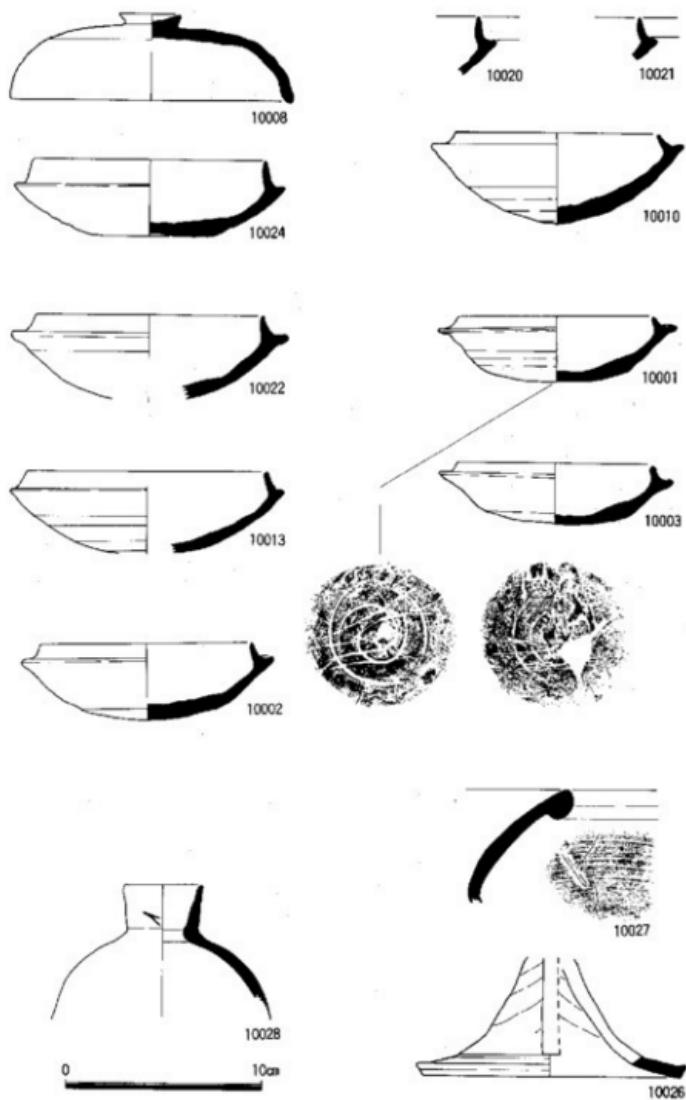


Fig. 6 1号墳出土遺物実測図(2) (1:3)

工人の手になるもの可能性もある。

その他の器種 10008は高环蓋である。环蓋 II b 頭に紐をつけた器形である。10028は、小形の提瓶である。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整である。10028は、甕の口縁部である。玉縁状の口縁端をもつ。頸部外面はカキ目調整で、ヘラ記号がある。10026は、高环脚部である。紋り痕を明瞭に残す。内外面回転ナデ調整を施す。

② 鉄器 (Fig. 7, PL. 29)

1号墳出土の鉄器には工具、武器がある。

工具 10101は、鉄斧である。刃部の一端を欠くが、ほぼ刃部幅3.8cmに復元できる。袋部幅3.6cm、袋部高2.3cmである。4.3cmの深さがある。袋部先端から刃部がやや広がる。

武器 武器には、鉄刀（？）と鉄鎌がある。

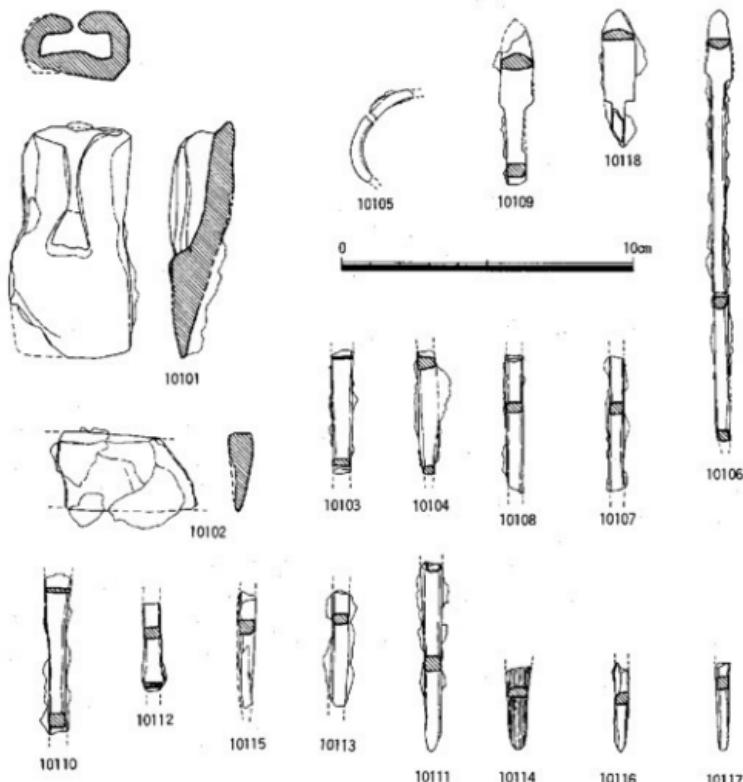


Fig. 7 1号墳出土遺物実測図 (3) (1:2)

鉄刀（10102） 10102は片側に刃がつくものと思われ、鉄刀と考えられる。錆化が著しい。
鉄鎌（10103、10104、10106～10118） 鉄鎌は、破片数にして15点出土した。同一個体もあると思われ、実数は若干減るかもしれない。

鋒部は、10109、10118、10106の3点である。いずれも片丸造の整鎌式である。109は鋒部長（残存）2.8cm幅1.1cm、106は鋒部長3.1cm、幅0.9cm、118は鋒部長2.4cm、幅1.1cmである。106は12.3cm分茎が残るが、範被は認められない。10110は、先端が薄くなっている。斧箭式の鉄鎌の関部と考えられる。10103も、先端が薄くなるがあまり広がらない。細根式の斧箭式と思われる。10112は範被の部分である。茎側に木質が残っている。10111、10114、10116、10117は茎の先端部である。いずれも若干尖り気味に仕上げられている。114は全面に木質が付着している。104、108、107、115、113は茎の破片である。断面は四角形である。

鉄鎌の茎は、中が空洞であるものが多い。これは脱炭が充分でないために、中心部に集まっていた炭素が抜け出てしまった結果である。鉄鎌の生産は、大量生産に対応するため、粗製粗造となっているのであろう。

不明金属製品（10105） 10105は、環状の金属製品である。折損面は白っぽく、鉄製品とするにも疑問がある。装身具の一種であろうか。鉄器はいずれも、玄室埋土からの出土である。

③ 装身具類 その他の遺物 (Fig.8, PL.33)

1号墳からは、小玉が3点出土している。いずれも、玄室埋土からの出土である。
10201は、ガラス製小玉である。色はコバルトブルーである。10203は滑石製の玉である。
10202もガラス製小玉である。色はライトブルーである。

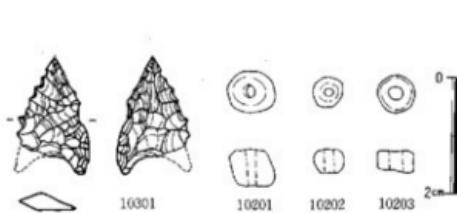


Fig. 8 1号墳出土遺物実測図 (4) (1:1)

10301は、玄室埋土から出土した黒曜石製の石鎌である。両側縁は鉗歯状になる。羽根戸古墳群周辺で、縄文時代遺物が出土することは珍しいことではなく、福岡県教育委員会によるD群の調査、西部墓園関係の一次調査であるN群の調査でも、縄文時代の土器、石器が出土している。近辺に縄文時代の遺跡があると考えられる。

2. 第2号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3, PL.4-1)

第2号古墳は、1号墳の東側に位置する。墳裾の最も近い所で測ると、1号墳から5m離れている。墳丘は現状では、径9～9.5mの円墳であるが、南側は、現状の裾部から墳頂までの

比高差が25cm程しかなく、屋根上から流れ込んだ土砂で、かなり埋め立てられていると思われる。北側の最も落差のある所での墳頂との比高差は1.5mである。

(2) 石室 (Fig.9, PL.4-5)

石室は、玄門付近から石室中央にかけて天井石が崩れ落ちており、大破している。単室の両袖型の横穴式石室であろう。主軸の方向をN-83°-Wにとり、西側に向かって開口している。

玄室の規模は、奥壁幅1.8m、右側壁幅1.8m以上、左側壁幅1.7m以上であり、ほぼ正方形に近い形になるのである。高さは、奥壁の現存高1.6m、左側壁の現存高1.9mである。

玄室の構築は、とくに腰石に大きな石を用いたという感はなく、全体的に大ぶりの石を用いている。奥壁は、2個の箱形の腰石の上に、不定形の大石と、その間を埋めるやや小さい転石で、構築されている。石が不定形であるため雑然と見えるが、横に目地をとおしたものと見てよからう。左側壁は、大ぶりの箱型の転石で整然とした煉瓦積みで構築されている。奥壁では、持ち送りが見られず、左側壁では、下から5段目から持ち送りが見られる。復原すると、天井高は2.5m近くなると思われ、1号墳のような前壁の高い玄室が考えられる。右側壁は、腰石を残して、ほとんど崩れ落ちている。玄門、袖石等の状態は不明である。

敷石は、約半分遺存している。敷石面から、銀環、鉄斧、鉄刀子、不明鉄器が出土した。

羨道は、閉塞施設の西端まで測って、約3m程であろう。壁画は、左側壁を見ると、玄室と同じく、大ぶりの石を整然と積んでいる。羨道では2面の埋葬面を検出した。第1面は、黒色土層を取り除いて検出した黄褐色土層面で、床面から7世紀後半代の須恵器蓋杯、上飾器盤などが出土した。第2面は、第1面の下約10cmで検出した敷石面で、第1面を掘りすぎた際に確認したものである。敷石面から耳環1個が出土した。第2面は、全掘せずに埋め戻した。

閉塞施設は羨道端から約1.6mの所から遺存している。上部の方は落石との区別がはっきりしていないが、小ぶりの角礫を積みあげた70cm程までが、本来の閉塞施設であろう。

(3) 出土遺物

2号墳からは、須恵器、土師器、鉄器、耳環、銀環が出土した。羨道床面や、玄室敷石面など、現位置に近い状態と考えられる遺物も多い。

① 土器 (Fig.10, PL.23)

20001、20002、20004は、羨道第1面の床面から出土した。001、002は完存品であるが、002の方が、001の下から出土しており、蓋をした状態ではなかった。

20002は、壺蓋IV類である。平たい天井部に短いかえりがつく。かえりは、受部より低い位置にある。天井平坦部にヘラ削りを施す。内面天井部は、静止位置での、不定方向のナデが見られる。20001は、壺身III類である。口縁は外反する。底部と口縁部の境は丸味を帯びている。底部の若干内側に、外へ踏張り気味の高台がつく。高台は貼付である。内外面ナデ調整で、底部は、静止ナデが施されている。20004は、土師器の盤である。精良な胎土を用いている。内

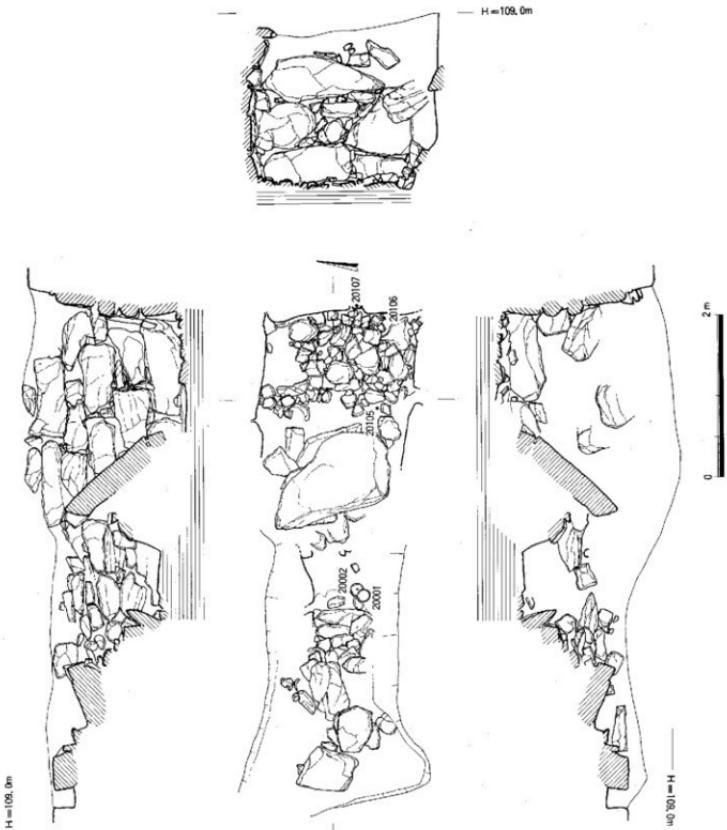


Fig. 9 2号石室剖面图 (1:50)

外面を丹塗研磨し、内面には粗い暗文を施す。20008は、破片資料で疑問であるが、坏身ⅠaないしⅠb類であろう。20003は、平底の坏身Ⅱ類である。底部は、ヘラ切り未調整、内外面回転ナデ、内面底部は静止ナデが施される。

20006は坏蓋Ⅱa類である。天井部と口縁の境に、鈍い段がつき、口縁端面は面取りされて、凹線状に凹む。外面の段から上部にヘラ削りが施される。20005はⅡb類である。外面 $\frac{1}{2}$ 程度をヘラ削りする。口縁内面には鈍い段がつく。20010、20009は坏蓋Ⅲ類である。010は器高が低く、底部から $\frac{1}{2}$ 程度をヘラ削りする。かえりは受部より低い位置にある。007は、やや口径が小さく器高が高い。鉗がつくものかも知れない。外面を約 $\frac{1}{2}$ ヘラ削りする。かえりは受部よりわずかに低い。

20009は、土師器把手である。断面は扁球形である。

20010は墳丘表採、他は、玄室から羨道を清掃中に出土した、埋土中のものである。

② 鉄器 (Fig.11、PL.30)

2号墳出土の鉄器には、工具、武器がある。

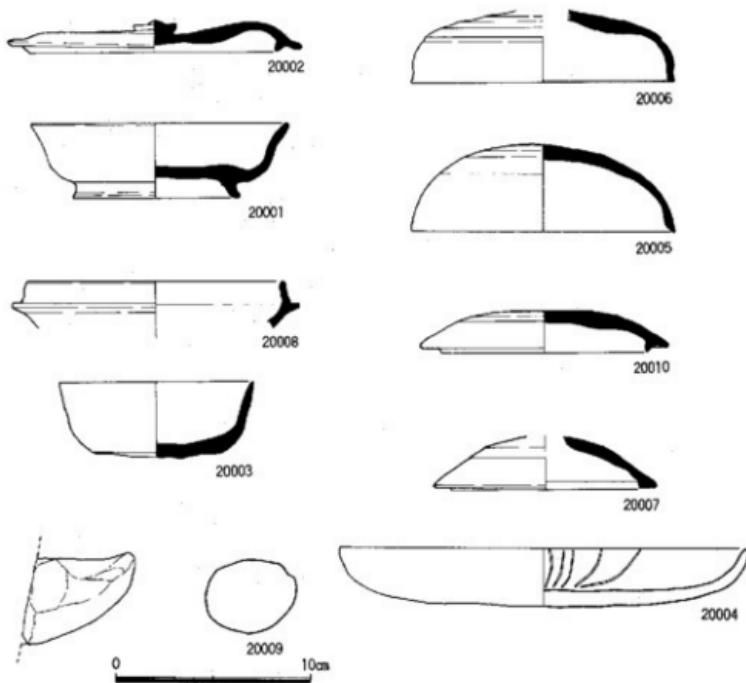


Fig. 10 2号墳出土遺物実測図 (1) (1 : 3)

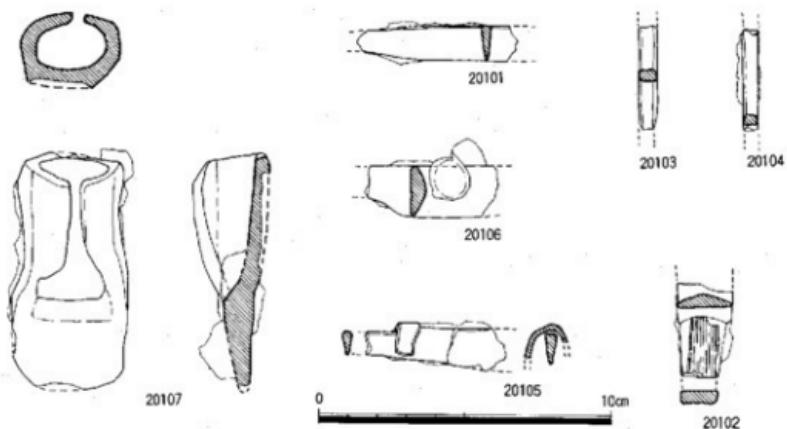


Fig. 11 2号墳出土遺物実測図 (2) (1:2)

武器 (20104、20103) 鉄鎌の茎片が2点出土している。断面形は四角形である。幅は20103が0.7cm、104が0.5cmである。残存長は103が3.5cm、104が3.4cmである。

工具 工具には、刀子、鉄斧、鎌がある。

鎌 (20102) 20102は、鎌の関部から茎にかけての部分と考えられる。刀部の断面は扁平な二等辺三角形である。短い関部から段をなして茎部がとりまく。茎の断面形は長方形である。表面には木質が残る。茎幅0.9cm~1.6cm。関幅1.8cm。

刀子 (20105、20106、20101) 20105は刀子の基から間にかけての部分である。柄金具が付着する。茎幅0.8cm、関幅1.1cmである。柄金具は幅0.7cmである。玄室右側壁付近から出土した。20106は、鋳造がすみ、本来の形がわからにくいか、刀子の基から間にかけての部分と考えられる。茎幅1.1cm、関幅1.6cmである。玄室右奥隅付近から出土している。20101も刀子の刃部片である。細くなっていく方が茎の方である。刃部幅1.2cmである。

鉄斧 (20107) 20107は鉄斧である。刃先を若干欠く。刃部幅3.9cmである。袋部は、幅3.6cm、高2.6cmの楕円形で、5.0cmの深さがある。袋部の先端から、刃部がやや広がる。玄室奥壁に刺さった状態で出土した。

出土位置を示したもの以外は、20101が淡道埋土、他は玄室埋土出土である。

③ 装身具 (Fig. 12, PL. 33)

2号墳出土の装身具には、耳環、銀環がある。

耳環 (20201) 20201は、長径2.8cm、短径2.7cmの銅胎部分が残る。鋳造が著しい。断面は、長径0.7cm、短径は0.5cmである。淡道の第2面の敷石面の出土である。



Fig. 12 2号墳出土遺物実測図 (3) (1:1)

銀環 (20202、20203) 銀製の梢円形の環である。20202は、広げられていると思われ、20203は、ねじ曲げられている。20202は長径4.0cm、短径2.3cm、20203は長径3.3cm、短径2.0cmである。202は玄室中央付近、203は右奥隅付近の出土である。

3. 第3号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3)

3号墳は、2号墳の北東に位置する。墳裾の最も近い所で、2号墳から3.5m離れている。墳丘の南側に、自然流水による溝が掘られている。この部分を墳丘に含めて考えると、径12mのほぼ円形の墳丘となるが、含めずに考えると10m×12mの卵形の墳丘となる。墳裾からの比高差は、最大で3.25mである。現状では、E群最大の規模をもつ古墳である。

(2) 石室 (Fig.13、PL.6、7、8)

石室は、单室で両袖型の横穴式石室である。主軸をN-54°-Eにとり、西侧に開口する。玄室は、やや奥行の方が長いが、ほぼ正方形である。玄室規模は奥壁幅2.0m、左側壁幅2.1m、右側壁幅2.5m、天井までの高さ2.2~2.4m、全壁高1.0mである。玄室内は盜掘のため奥壁側は、腰石の根石が露出するまで掘り込まれている。しかし、玄門側では、馬具(轡)、刀子、鉄鏃などの鉄器が出土している。

奥壁は、巨大な箱形の転石1個を腰石とし、天井まではほとんど垂直に積み上げる。奥壁中央に不定形の大きな転石を用いているので雑然と見えるが、横に目地をとおしたものであろう。左側壁は2個の腰石を据え、その上に、比較的形のそろった大ぶりの石で、整然とした煉瓦積みを行う。4段目から急激に持ち送って天井に至っている。右側壁は、巨石を1個腰石にすえ、縦横の目地をそろえながら、6段積み上げている。4段目から若干持ち送って天井に至る。この持ち送りの角度が左右で異なるために、右側壁側(尾根側)に若干傾いた横断面形となっている。玄門は大ぶりの転石2個を袖石とし、その上に2段積んで櫛石を架ける。それからほぼ垂直に積みあげて前壁を構築し天井に至る。従って、玄室の縦断面形は、方形に近い。櫛石から

樋石までの高さは1.1mである。天井は2枚の石を架けて構築されている。

羨道は、樋石から測って約3.0mである。樋石のすぐ西側と、開口部付近に、地山中の巨大な転石が露出し、羨道の床面を規制している。壁面は、玄室に比べると、石も小さめでやや雰囲感があるが、羨道左側壁は縱方向の目地が、比較的通っている。

閉塞施設は、二つの大石の間に築かれている。一枚の平たい板石を内側に立て、その背後を角礫で充填したものであろう。

閉塞前面の、開口部付近からは、鉄滓が供獻されているのが確認された(Fig.14、PL.8-2)。地山の大石の上を中心に、須恵器壺蓋1個と、鉄滓が散布している。鉄滓は、ほとんどが精煉滓であるが、鍛冶滓もわずかに含まれている。

鉄滓を供獻する古墳は、1977年に集成された段階で福岡市周辺で32例あり、早良平野周辺では19基を数える。その後も調査例の増加に伴って類例が増加し、1982年の集成では、70基、早良平野周辺に限っても49基と、分布の一大中心をなしている。それ以後も、羽根戸古墳群N群、E群、広石古墳群、笠間谷古墳群等で鉄滓供獻墳が発見され、まだまだ増加していくものと思われる。この集中傾向は調査例の増加に伴うところも大きいが、この地域が、鉄生産を主要な生業としていたことを示しているとされている。

(3) 出土遺物

3号墳からは須恵器、鉄器、玉類が出土している。原位置に近いと思われるものは、羨道部で鉄滓と一緒に出土した須恵器(30001)である。玄室内からは鉄器が多数出土しているが、玄室内は荒らされており、原位置かどうかは極めて疑問である。

① 上器 (Fig.15 PL.23,24)

出土土器はすべて須恵器であり、器種には壺身、壺蓋、器台がある。

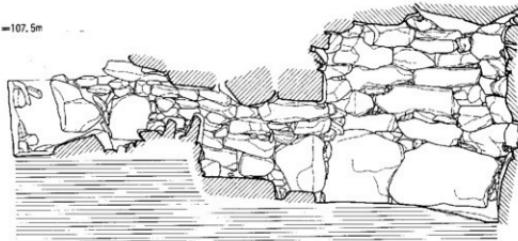
壺身 I a 類 (30006) 30006は、かえりの立上りが比較的高く、径が大きいI a 類である。ヘラ削りは、上半はナデ消されるが、約程度まで施されている。

壺身 I b 類 (30002, 30003) 30002は、基部が厚く、端部が尖る断面三角形のかえりをもつ。外面のヘラ削りは、約程度まで施される。底部は丸みを帯びる。30003は、底部がかなり平たくなっている。かえりは断面三角形である。ヘラ削りは外面約程度まで施される。

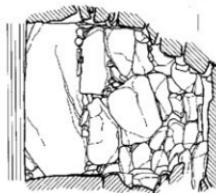
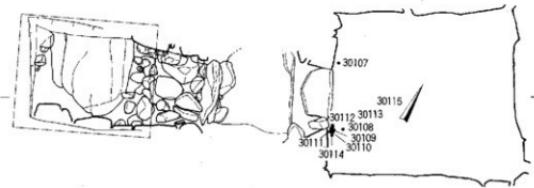
壺身 I c 類 (30007) 30007は、異形の壺身である。かえりは短く内傾する。受部径は、9.5cmと、極めて小形である。また口径に比べてやや深めの器形である。底部はヘラ切りのままである。

壺蓋 II a 類 (30001, 30004) 30001は羨道出土の壺蓋である。口縁外面に沈線状の鈍い段がつき、口縁内面にも鈍い階がつく。ヘラ削りは外面約程度まで施されていると思われる。30004も、外面に沈線状の段がつく。口縁内部にも段がつく。ヘラ削りは約程度まで施される。いずれも、天井部が丸くなっている、また、口縁部との境も不明瞭になっているII a 類である。

H = 107.5m



H = 107.5m



H = 107.5m

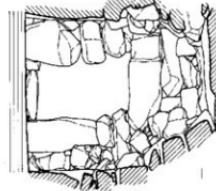
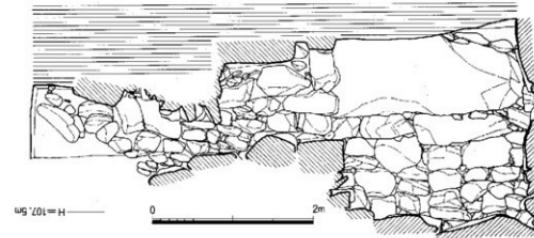


Fig. 13 3号墳石室実測図 (1:50)

壺身Ⅱb類 (30012) 30012は、破片資料であるが、Ⅱb類と思われる。口縁部内面に鈍い稜線がめぐる。

壺身Ⅱc類 (30005、30014、30013) 005、014、013の3個は、径がやや小ぶりで、ヘラ削りが天井部付近にのみ施され、平坦になる。口縁部はやや内済気味に屈曲する。Ⅱc類である。

その他の器種 30008は器台の接合部と思われる。内外面とも回転ナデである。30009は、器台か、あるいは、台付壺等の台付土器の脚部である。脚据はあまり広がらず、屈曲部をもつ。透かしは、長方形である。破片資料があるので、何ヶ所に施されているかは不明である。調整は、内外面回転ナデである。

30001以外はすべて、漢道部の埋土内からの出土である。

② 鉄器、装身具類 (Fig.16, 17, PL.31, 33)

3号墳は、玄室床面から鉄器が多数出土している。出土した鉄器には武器、工具、馬具がある。

武器

武器には、弓金具、鐵鎌がある。

弓金具 (30104) 弓の留金具である。棒状部の両端に玉状の頭部がつく。図上で、上側の頭部は叩いて、扁平につぶされている。棒状部には木質が付着している。長3.4cm、幅0.5cmである。

鐵鎌 (30101、30102、30103、30105、30109、30110、30112、30113、30114、30115) 鐵鎌は、破片数で10点出土している。

鋒部の残っているものは30101、30114、30102、30112がある。30101は広根式の関部で、斧箭式になる可能性もある。関幅1.1cm、茎幅0.9cmで、茎の断面は扁平である。30102は、片刃箭式の鋒部である。刃幅1.0cm。

30114、30112は、整箭式である。112は両丸造で、鋒部がやや広めである。鋒長2.6cm、関幅1.1cm。114は片丸造である。鋒部長2.3cm、関幅0.8cm。

30109、30110は茎の範被の部分である。30109は範被幅0.8cm。30110は範被幅0.7cm。いずれも断面は四角形である。

30113は茎の端部である。端部は尖り気味に仕上げられている。幅は0.3cmである。

30103、30105、30115は茎の



Fig. 14 3号墳遺物出土状況図 (1:20)

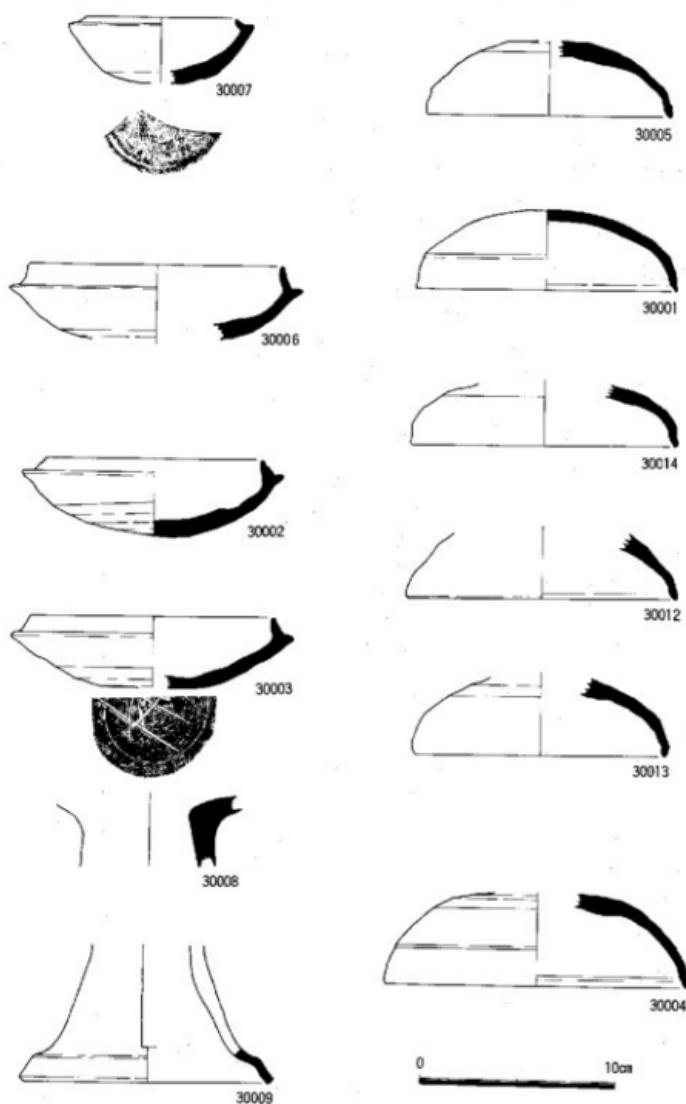


Fig. 15 3号墳出土遺物実測図(1) (1:3)

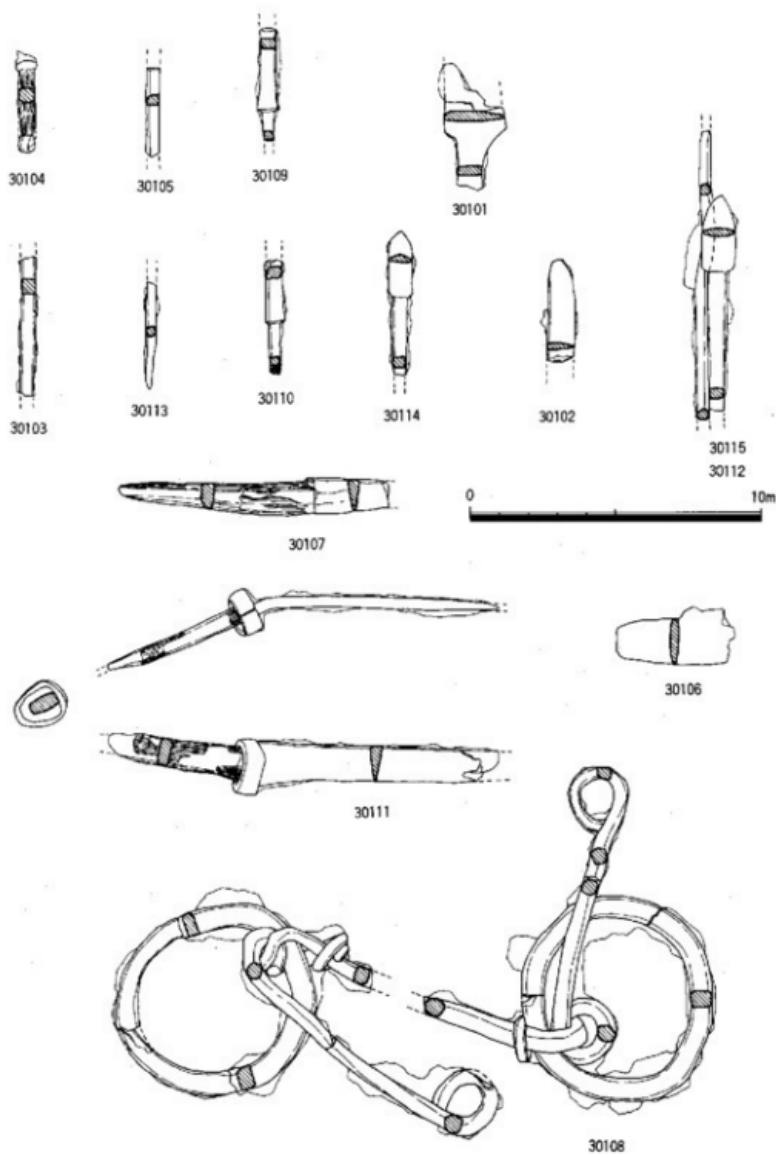


Fig. 16 3号填出土遗物实测图 (2) (1:2)

破片である。



Fig. 17
3号墳出土遺物実測図

(3) (1 : 1)

工具 (30107、30111、30106) 30107、30111はいずれも刀子である。107は茎に木質が残る。111は、関から大きく折れ曲がる。柄金具が付着する。茎に木質が残る。30106は不明であるが、利器の関の部分であろうか。

馬具 (30108) 備金具が出土している。円環形の鏡板に、引手金

具と、銜金具と同じ所にとりつけられている。立闇はつかない。鏡板の径は6.5~7.0cmで、断面は方形である。

30202は、ガラス製丸玉である。玄室埋土出土。

4. 第4号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig. 3 PL. 9-1)

4号墳は、3号墳のすぐ南東側にある。墳丘の最も近い所で、1.8mと近接している。墳丘は現状では、約7mの円墳であるが、南側の尾根側では現状の裾部と墳頂の比高差がほとんどなく、2号墳と同様に尾根上から流れ込んだ土砂で埋め立てられてゐると思われる。北側の最も落差の大きい所での、墳頂との比高差は1.75mである。

(1) 石室 (Fig. 18 PL. 9, 10-1)

石室は、单室で両袖型の横穴式石室であるが、天井を失い、また、右側壁と玄門、前壁のほとんどを失い、大破している。主軸の方向をN-82°-Eにとり、西側に開口する。

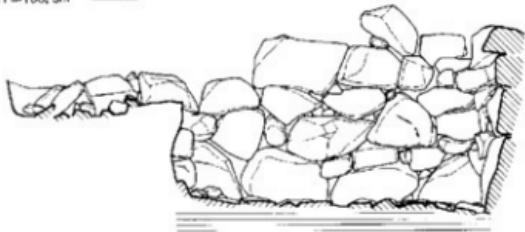
玄室の規模は、奥壁幅1.4m、右側壁幅2.0m以上、左側壁幅2.2mであり、やや玄門にむかってすさまり気味の長方形である。高さは、奥壁の現在高1.5m、左側壁の現在高1.6mである。壁面には明確な持ち送りは見られない。

玄室の構築は、他の古墳に比べて腰石が小さめるのが特徴である。奥壁では、2個の腰石がやや大きいが、ほぼ同じくらいの大きさの転石を積み、縦に目地が通っている。左側壁は、腰石に4個の転石を使うが、上に積まれている石と大きさはほとんど変わらない。これらの石を、煉瓦積みで積み上げる。右側壁でも、上部の方の浮いた小転石は、裏込石が露出したものであり、壁面の構築は、左側壁と同様なものであったと考えられる。

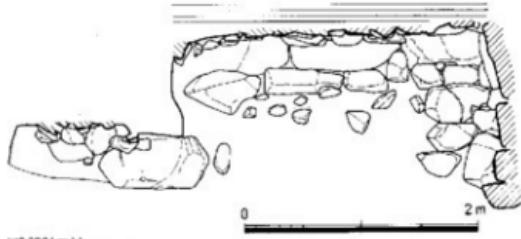
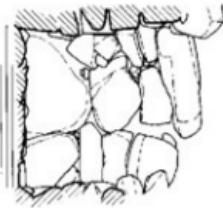
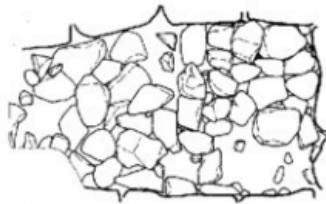
玄門は、右袖石と前壁を失う。左袖石は2段分遺存している。玄室床面は、敷石が良く遺存していたが、遺物は出土していない。羨道は、落石の危険があるため未調査である。

4号墳からは、玄室内埋土より、図示に耐えない須恵器、土師器片数点以外は、遺物が出土していないが、比較的小さい石を使った長方形石室は、最近調査された羽根戸古墳群B群第4号墳、羽根戸南古墳群E群第4号墳等に類例があり、いずれも6世紀前半頃の須恵器を出土しているとのことである。羽根戸古墳群周辺では、古い段階に属する石室である。これらの類例

H = 106.5m



— H = 106.5m —



— H = 106.5m —



Fig. 18 4号填石室実測図 (1:50)

から推測すると、袖石は、現状以上にそう高くならず、後退は短く、若干開き気味になるものと考えられる。

5. 第5号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3 PL.11-1)

5号墳は、4号墳から少し離れて東側にある。墳丘裾の最も近い所で測ると、17.5mほど離れている。

現状での墳丘は、東側がやや出っ張るが、ほぼ墳丘径8mの円墳である。しかし2号墳、4号墳と同様に南側は、尾根からの流上で若干は埋め立てられている可能性がある。墳丘裾と墳頂の比高差は、尾根側で1m、谷側で3mある。

(2) 石室 (Fig.20 PL.10-2, 11, 12)

石室は、単室で両袖型の横穴式石室である。主軸をN-82°-Eにとり、西側に開口する。

玄室は、ほぼ方形であるが、不定形の腰石の形に左右されて、多少歪んでいる。

玄室の規模は、奥壁幅2.0m、右側壁幅2.0m左側壁幅2.4m、天井までの高さ2.1m、前壁高1.0mである。玄室内は、過去の盗掘のため、腰石の根石が露出するまで振り込まれている。

奥壁は、巨大な箱形の転石1個を腰石とし、大ぶりの石で7~8段積んで天井に至る。持ち送りは4~5段目から見られ、前壁の2段目の高さにはほぼ対応する。天井に近くなるにつれて、石の大きさを減じていく傾向が見られる。ほぼ、横に目地がとおっている。なお、Fig.20では、左側壁が玄門に向かって開いているため、左側壁の奥半分が見通されているが、腰石から天井中央に至る、大ぶりの石の左側輪郭線が、ほぼ左側壁と奥壁の境界線である。

左側壁は大ぶりの腰石2個を据えているが、長さが足らず、袖石近くは、小さな石を2段積んで、その上に腰石と同じくらいの大きさの石を積むという、不自然な積み方をしている。そのため楣石の高さ付近までは、大ぶりの石を用いている割には、目地が通っていない。しかし、天井近くは石は小さくなるが、ほぼ横に目地がとおる。下半は外傾が著しく、断面図での四段目から急激に持ち送る。右側壁は、高さ1m近い巨石2個を腰石に据え、そのすぐ上から除々に持ち送って天井に至る。目地はほぼ横に通る。このように、左右両側壁で、持ち送り方が異なるために、玄室の横断形はかなり谷側へ傾いている。そのため、右側壁は、石室中軸近くまでせり出しており、天井が谷側へ大きく傾いて架けられるという結果となっている。側壁の腰石下面のレベルを見ると、約20cm右の方が高く、また、両袖石下面のレベル差も、右袖の方が20cm程高い。この傾斜が影響しているのであろうか。

玄門は、大ぶりの石2個を袖石に据え、上に2段積んで楣石を架け、その上の前壁は、右側壁に押されて大きく谷側へ傾きつつ、5段で天井に至る。楣石の中心と、楣石の中心は約20cmずれている。

遺構は、閉塞施設の外側はかなり壁が落ちているが、樋石から2m程が復原できる。閉塞施設は、玄門部の第3樋石から30cm程離れた第2樋石と、1.1m程離れた第1樋石の間に角礫を充填して構築されていたと思われ、高さ30cm程が残存している。

(3) 出土遺物

5号墳からは、須恵器、鉄器、耳環、玉類が出土した。現位置をとどめるものはない。

① 土器 (Fig.19 PL.24)

出土土器はすべて須恵器である。坏蓋、坏身、壺 (?) がある。

坏蓋 (50004、50001) 50004は丸い天井部をもち、口縁内側に鈍い段がつく。ヘラ削りは少程度まで施されるようである。II b類。50001は、平坦な天井部に屈曲する口縁部をもつ。ヘラ削りは少程度まで施される。II c類。

坏身 (50003、50002) 50003は、かえりの立上りは高いが、小形である。ヘラ削りは少以下で粗い。類別に迷うが、I b類としておく。50002は、大形で、かえりの立上りも高い。ヘラ削りは少程度施される。I a類である。

壺 (50005) 50005は壺としたが、底部が平底に近く、底部にまでカキ目が施されるなど疑問な点も多い。あるいは、横瓶など、別の器形になるのかも知れない。調整は、まず平行叩きを外面に施す。内面にはこの時の同心円文の當て具底が残る。その後底部にまでカキ目を施す。

② 鉄器 (Fig.21 PL.30)

5号墳からは鉄鏃が2点出土している。50101は面丸造の撃箭式である。関幅1.0cm、茎幅0.6cm

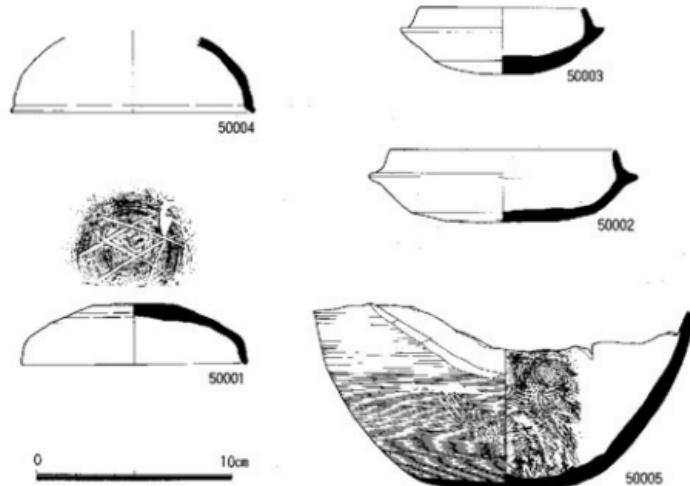


Fig.19 5号墳出土遺物実測図 (1) (1:3)

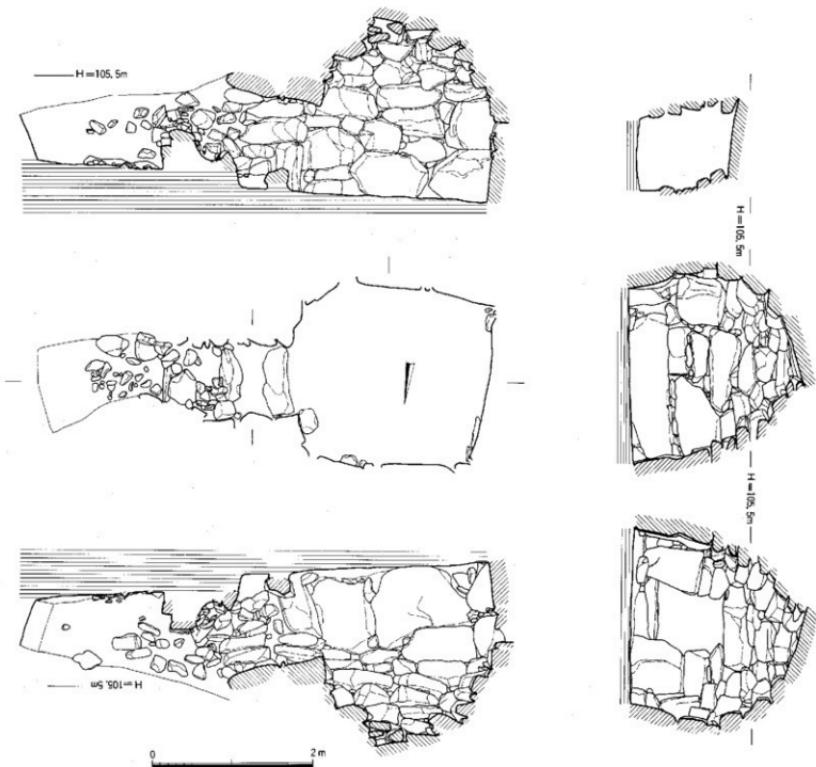


Fig. 20 5号墳石室実測図 (1 : 50)

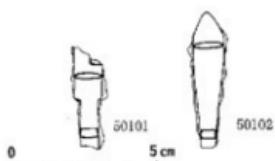


Fig. 21 5号墳出土遺物実測図

(2) (1 : 2) 短径0.5cmの楕円形である。

50203～50211は、ガラス製の丸玉である。径0.7cm～0.8mm厚さ0.5～0.6cmほどで、ほぼ同形同大である。風化のため、表面は黒色化して、ろくなっている。

50212、50213は、小玉である。50212は材質がよくわからない。紅色をしている。径0.4cm、厚さ0.3cmである。50213はガラス製の小玉である。明るい緑色をしている。径0.4mm、厚0.3cmである。50201、50203が篠塚埋土からの出土で、他は玄室埋土からの出土である。

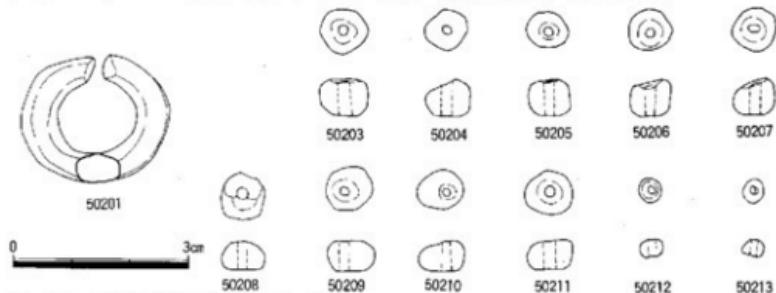


Fig. 22 5号墳出土遺物実測図 (3) (1 : 1)

6. 第6号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig. 3 PL.13-1)

6号墳は、5号墳の北東に位置する。墳丘裾の最も近い所で4.5m離れている。墳丘は現状で約8mの円墳である。墳丘裾と墳頂の比高差は尾根側で0.5m、谷側で1.25mである。尾根側の比高差が小さいのは、流土の埋め立ての可能性もある。

(2) 石室 (Fig. 23 PL.13-2, 14-1)

石室は、単室両袖型の横穴式石室である。天井部を失う。主軸の方向をN-87°-Eにとり、西側に開口する。

玄室は、奥壁幅1.5m、左側壁幅2.0m、右側壁幅2.1mの長方形であり、敷石が帯状に遺存している。奥壁、左側壁は、腰石が特に大きいということではなく、3個の腰石の上に、同程度の石を横方向に目地が通る煉瓦積みをしている。右側壁は、やや大きい石を2個腰石に据え、その上に、ほぼ横に目地がとおる煉瓦積みで築いている。各壁の現存高は、奥壁1.7m、左側

壁1.8m、石側壁1.3mである。持ち送りは、奥壁では見られず、左側壁で若干見られる。右側壁で壁石がせり出しているのは、崩落のためと思われる。玄門は、右袖石はやや大きな石を据えているが、左袖は小ぶりの石を3段積む。上面のレベル差から見て右袖にももう1段積んで、その上に楣石を架けて玄門を構築したと思われる。閉塞は、楣石のすぐ前面に角礫を積んで構築されている。羨道は1.0m程遺っているが、これ以上大きく延びることはないと思われる。

6号墳石室の形状は、4号墳に共通するところが多い。また、羨道から玄室へ一段低くなっているのも古い要素といえる。しかし、腰石や袖石がやや大きいところなど、やや新しい要素が見られる。出土した須恵器(Fig.24)のうち、最も古手の特徴をもつ60001は、羽根戸B—4号墳出土の須恵器より、やや新しいようである。E—4号墳について古い段階に属する古墳の可能性が高い。

(3) 出土遺物

① 土器 (Fig.24 PL.24)

6号墳から出土した遺物はすべて須恵器であり、図示することのできた遺物は8点にすぎない。器種には、壺蓋、壺身、壺(?)がある。

壺身 (60007、60008) 60007は、壺身の口縁部破片である。かえりの立上りは内傾しながらわずかに外反する。口縁端に至る程薄く仕上げている。かえりと胴部の境は、内面でも明瞭な稜線がつく。壺身Ⅰb類である。

60008は、かえりの立上りが短く内傾する。受部は外側へ突出する。受部の推定復原径は13.6cmである。かえり部と胴部の境は、内面でも明瞭な稜線がめぐる。回転ヘラ削りは、底部から1/3程まで施されている。壺身Ⅰc類である。

壺蓋 (60001、60002、60003) 60001は口縁部と天井部の境に沈線状の段がある。段から天井部にかけてヘラ削りが施される。口縁部内面にも沈線状の段がめぐる。Ⅰ類の壺蓋と考えられる。

60002は、小片で径に若干疑問があるが、やや大きめであるのは間違いない。回転ヘラ削りは、下半はナデられて棱は不明瞭であるが、1/3程度まで施される。天井部がやや平坦気味ではあるが、壺蓋Ⅱb類であろう。

60003は、大きめの器形で、復原口径14.2cmになる。しかし、平坦な天井部をもち、口縁部で屈曲し、口縁端が直立する。また回転ヘラ削りが、天井部にしか施されない。これらの点で壺蓋Ⅱc類の特徴を備えている。

60005、60004はそれぞれ小片ではあるが、壺蓋Ⅱ類の口縁部である。

壺 (60006) 60006は口縁部破片である。壺と考えられるが確かではない。口唇部には強い回転ナデによる凹線がめぐっている。調整は、内外面回転ナデである。

出土位置は60001、002、005、006が玄室、004が羨道部のそれぞれ埋土出土、003が閉塞部出土、007、008が墳丘表採品である。

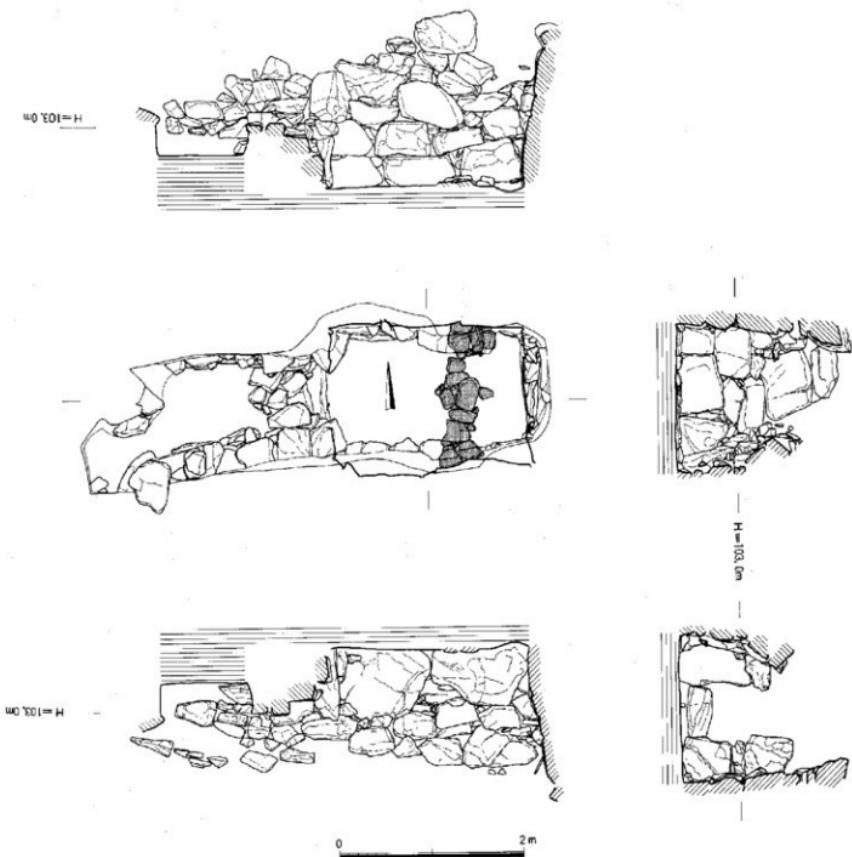


Fig. 23 6号填石室实测图 (1:50)

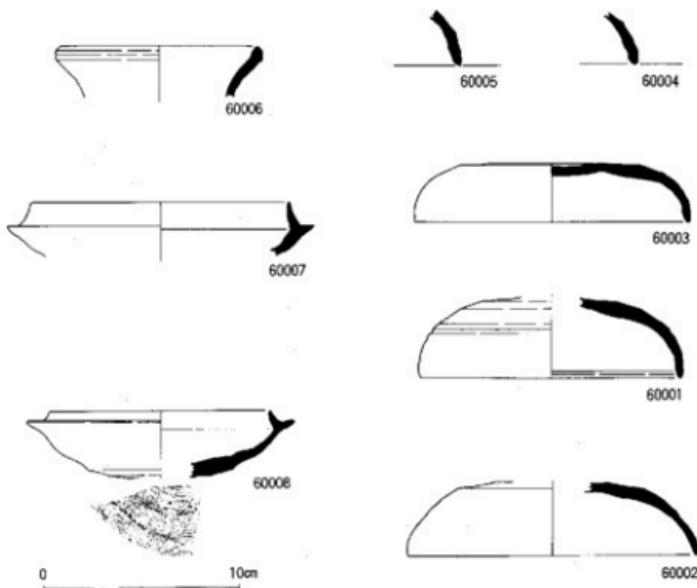


Fig. 24 6号墳出土遺物実測図 (1:3)

7. 第7号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3 PL.14-2)

7号墳は、6号墳からやや離れて東側に位置する。墳丘裾の最も近い所で、26.5m離れている。現状では径7mの円墳であるが、南側は流土の埋め立ての可能性がある。墳丘裾と墳頂との北高差は、尾根側で0.25m、谷側で2.5mである。

(2) 石室 (Fig.25 PL.15, 16)

石室は、单室両袖型の横穴式石室である。主軸をN-77°-Wにとり、西側に開口する。玄室に奥壁幅1.6m、左側壁幅2.3m、右側壁幅2.2mの長方形である。敷石が右奥隅に若干遺存している。天井までの高さは2.0m、前壁高は0.7mである。

奥壁は、大ぶりの転石2個を腰石に据えて4段積み、5段目から石の大きさを減じて持ち送り、天井に至る。ほぼ横に目地が通る。

左右側壁は、やや小さめの腰石の上に3~4段積み、石の大きさを減じて持ち送り、天井に至る。横方向に目地がとおっている。

玄門は、大ぶりの袖石2個の上に右袖は2段、左袖は3段積み、櫛石を架けて構築されている。また櫛石は、小転石4個を2段2個ずつ並べ積まれている。櫛石から櫛石までの高さは、0.8mである。

前壁は、大ぶりの櫛石の上に4段積んで構築される。持ち送りは3段目から急激に行われている。

羨道は、壁面がかなり崩れ落ちているが、櫛石から1.5m程が残っている。若干「ハ」の字形に開いていくものと思われ、現状以上にそう伸びることはないであろう。

7号墳の平面形は、長方形プラン「ハ」の字形の短い羨道など、4号墳、6号墳に類似する点が多い。また、側壁の腰石に、上部と比べて特に大きさの違わない石を用いているのも共通している。しかしながら、奥壁の腰石は大型化してきており、また玄室上半の持ち送りの形状は、3号墳、5号墳等に共通しており、新しい特徴も持っている。

なお、閉塞施設はすでに跡形なく失われている。しかし、羨道が短く、現状での開口部から、0.6mの位置まで羨道部天井が覆っており、櫛石からの間は0.9mである。従って、先に述べたような石室の特徴から、6号墳に類似した閉塞施設を考えられよう。

(3) 出土遺物

7号墳からは、須恵器・土師器、玉が出土している。多くは玄室埋土からの出土である。

① 土器 (Fig.25 PL.25)

出土土器には須恵器、土師器がある。器種には、壺身、壺蓋、壺がある。

壺身 I a 類 (70008) 70008は、かえりの立ち上がりが直に近く高い。また口縁端で薄くなり、端部は丸くしあげられる。内面のかえりと胴部の境には稜がつかない。ヘラ削りは、外面1/3程にまで及ぶ、受部径は16cmである。

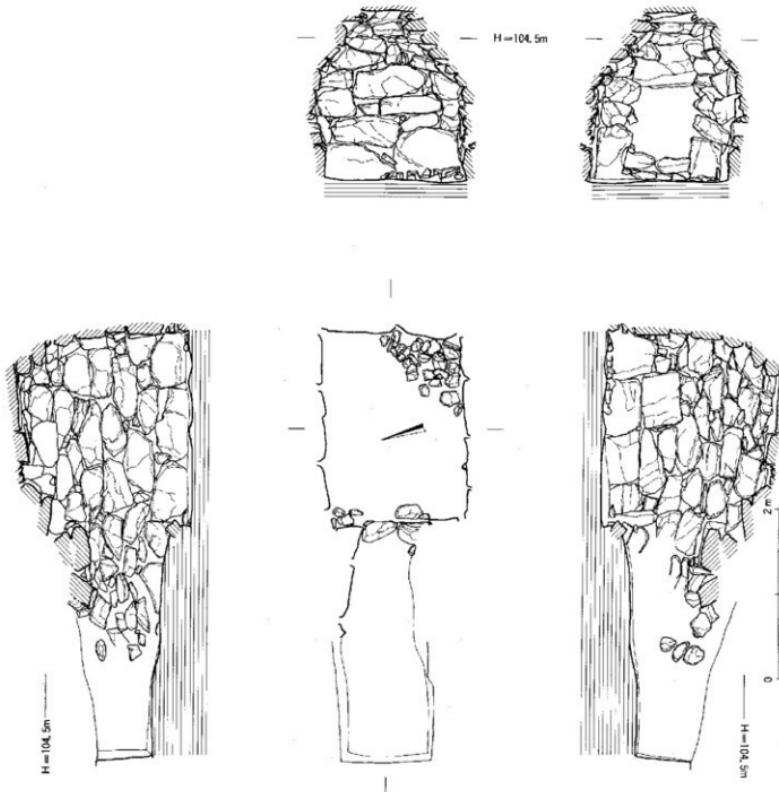
壺身 I b 類 (70005, 70007) 70005は、かえりが薄く立ち上がりが低く内傾する。端部は尖り気味に丸く仕上げられる。内面のかえりと胴の境は、かなり明瞭である。ヘラ削りは外面1/3程の範囲に施される。受部径は推定復原で17cmである。受部が突出するが、大きさ、かえり、ヘラ削りの特徴から、I b 類に含められよう。70007は、かえりが薄く、端部を尖らせる。かえりと胴部の内面の境界には稜がたつ。ヘラ削りは外面1/3程度に施される。受部径は15.4cmである。

壺身 I c 類 (70006) かえりの立ち上がりが短く、断面三角形で内傾する。受部は突出する。内面のかえりと胴部の境には稜がたつ。回転ヘラ削りは1/3程におよぶ。受部径は14cmである。

I b 類とすべきかもしれないが、かなり小形化している点を重視して、一応 I c 類としておく。

壺蓋 II a 類 (70002, 70003) 70002は天井部と口縁部の境に沈線状の段がつく。口縁内面の段はなく端部は丸く調整される。ヘラ削りは、天井から1/3程度と思われる。70003は、天井

Fig. 25 7号墓石室实测图 (1:50)



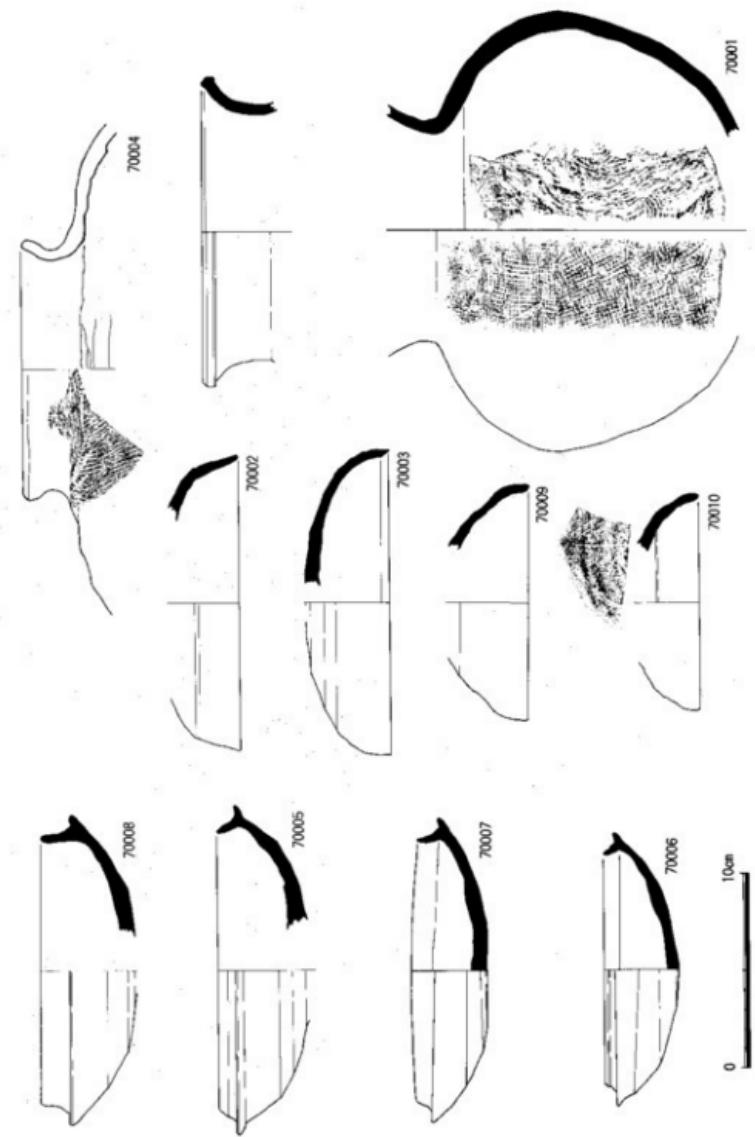


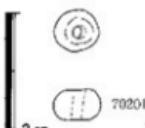
Fig. 26 7号坑出土遗物实测图 (I) (1 : 3)

部と口縁部の境は不明瞭である。口縁内部に段がつく。ヘラ削りは3分程に施される。

珪蓋 II c 類 (70009、70010) 70009は小形で、口縁端部が内曲する。ヘラ削りは、天井から3分程である。70010は、遺存部分にはヘラ削りは見られない。

甕 (70001) 70001の口縁部と胴部は、焼成、色調から同一個体と考えられるが、接合部がなく、別個に図示した。口縁端部は三角形に面取りされる。頸部は内外面向転ナデ調整される。胴部は扁球形で、外面は平行叩き、内面は、同心円文の当て其痕が残る。

土師器甕 (70004) 短く外反する口縁部に強く張る肩部をもつ甕である。胴部外面は平行



叩き、内面はヘラケズリされる。この時期の土師器甕には見られない器形であり、いわゆる「擬須恵土師器」と考えられる。

②装身具類 (Fig. 27 PL.33)

Fig. 27-70201は、ガラス製の丸玉である。径0.7cm、厚0.5cm

Fig. 27 7号墳出土遺物実測図
(2) (1:1)

8. 第8号古墳

(1) 位置と墳丘の現状 (Fig.3)

8号墳は、7号墳のすぐ北側にある。墳丘裾部の最も近い形で測ると、約3m離れている。

墳丘は、北側を一部削平される。現状から判断すると、墳丘径9m程の円墳となろう。墳丘裾から墳頂までの比高差は、尾根側で1.0m、谷側で2.25mである。

(2) 石室 (Fig.28 PL.17, 18)

石室は、单室で、両袖型の横穴式石室である。主軸をN-72°-Wにとり、西側に開口する。玄室は、若干奥へ開き気味の方形である。玄室規模は、奥壁幅1.25m、左側壁幅1.9m、右側壁幅2.1m、天井までの高さ約2m、前壁高0.7mである。玄室内は、過去の盗掘により、玄室中央付近が掘り凹められているが、左袖付近と、右奥隅には敷石が残っている。

奥壁は、不定形の転石3個を腰石に据え、すき間を小ぶりの転石で埋めながら、2~3段目で目地を整え、腰石から8段で天井に至る。持ち送りは5段目から行われている。持ち送りの部分の石は、若干下半部より小さめである。

左側壁は、大ぶりの転石2個を腰石に据え、ほぼ横の目地を通しながら、8段積まれる。5段目から持ち送られて天井に至る。右側壁は腰石を3個据える。奥壁の腰石は扁平で、2段積んで他の2個の高さに合わせてある。しかし、その上は、石の大きさがまちまちであり、とくに玄門側と奥壁側で、使っている石材の大きさにかなり差がある。そのため、目地の通らぬ雑然とした積み方となっている。しかし持ち送りの始まる境界(断面上で4段目)は比較的よく目地が整っている。各壁面の持ち送りの始まるレベルは、ほぼ同じで、奥壁から両側壁にはほぼ一線に目地が通るといえ、玄門袖石の最上段に相当する位置である。

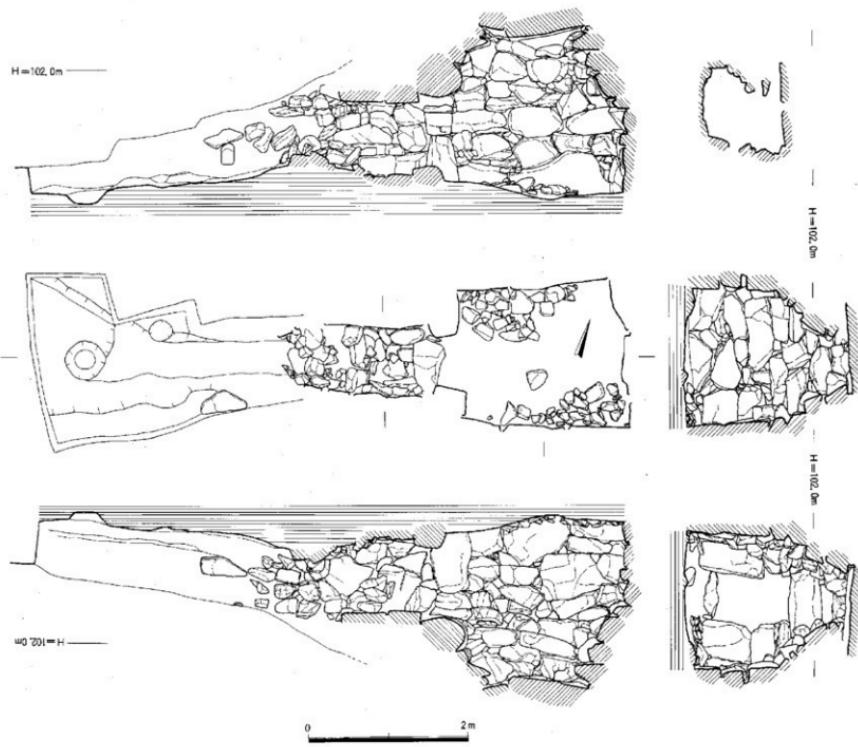


Fig. 28 8号填石室实测图 (1:50)

玄門は、大ぶりの転石2個を両袖石に据え、その上に2段積んで楣石を架ける。前壁は、楣石のすぐ上から持ち送られ、2段で天井に至る。楣石から、楣石までの高さは0.85mである。楣石は、両袖石から若干羨道側へずれておかされている。

羨道は、楣石から2.2~2.7mの部分であろう。壁面がよく残っているのは1.9m程度である。羨道床面には、敷石が見られ、その直上に、供獻の須恵器が、ほぼ原位置に近いと考えられる状態で出土した。これらについては、遺物の項で詳しく述べる。また羨道埋土からも、完存の身3点が出土しているが、出土レベルが高く敷石面の土器と共伴とは考えられず、またこのレベルでの埋葬面も認められないので、原位置とは考えられない。

閉塞施設は、供獻須恵器群のすぐ外側に、扁平な石を3枚程立て、その背後を角砾で充填して構築したものと思われる。根石に近い部分が、約1mにわたって残存している。

(3) 墓道

羨道は、閉塞外にも若干延びた可能性もあるが、その外側で、玄室清掃のためのトレンチを入れていた所、須恵器破片が多数出土した。そこで、土器の散布範囲の確認のため、トレンチを広げた所、墓道が確認された。石室主軸から、北の方へ曲がって、谷筋へ降りていくと考えられる。

(4) 羨道内出土遺物

① 出土状況 (Fig.29 PL.9)

羨道出土の須恵器群は、楣石のすぐ前面に羨道右側壁に接しておかれていた。中軸に近い方が破片が多く、積み重ねが多いのは、若干動かされているのかも知れない。

出土した須恵器の器種は、壺身、壺蓋、高壺蓋、器台がある。蓋坏3組が、蓋を被せた状態で出土した。3組いずれも内蔵物がある。80011には魚骨(付図参照)、80005から鍾金具、80014からは、鞆口金具、釘が出土している。また80007、80008内には、鍾金具、80003内には鍔金具が収められていた。

② 土器 (Fig.30, 31 PL.26)

壺蓋 II b 類 (Fig.30)

80010、80004、80013 80010は、80011に被せられていたものである。体部はやや浅い。口縁内面に凹線がめぐっている。ヘラ削りは胴部1/3の範囲に施される。80004は、80005に被せられてい

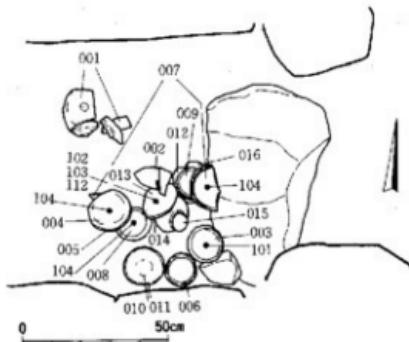


Fig.29 8号墳羨道部遺物出土状況 (1:20)

た。口縁内面に沈線状の段がめぐる。回転ヘラ削りは胴部の $\frac{1}{2}$ 程まで施される。800013は、800014に被せられていた。口縁がやや屈曲する。ヘラ削りは天井部から $\frac{1}{2}$ 程度に施されている。

坏蓋Ⅱc類 (80016、80012) 80016は、天坦に近い天井部をもち、口径が小さい。端部は丸く仕上げられている。回転ヘラ削りは、天井部に施されるのみである。800012も、80016とはほぼ同形同大で、ヘラ削りの範囲も全く同じである。また、単純ではあるが同一のヘラ記号をもつ。ただ、012は016に比べて成形の丁寧さに欠け、歪みや焼けぶくれを生じている。同一工人とまでは断言できないが、極めて近い関係にある人の制作によるものと考えられる。

高坏蓋 (80001) 80001は、高坏蓋である。坏縁Ⅱa類に擬宝珠形の鋸をつけた形態である。口縁内は段がめぐる。回転ヘラ削りは天井部から $\frac{1}{2}$ 程度の範囲に施される。

直口壺 (80018) 80018は直口壺である。口縁部は短く直口する。口縁端は丸く仕上げられる。肩部はなで肩であるが、胴部上位 $\frac{1}{2}$ 程で強く屈曲して胴部に至る。底部は回転ヘラ削りを施して、丸底に仕上げている。調整は、外底部のヘラ削り以外は、回転ナデを施している。外面には自然軸がかかっている。

坏身 (Fig.30、31) 坏身は8点出土した。また、Fig.30-80035、036、040は、漢道理土出土のものであり、これについては後で述べる。

坏身Ⅰb類 (Fig.30-80011、80005、80014、Fig.31-80003、80006) 大半の坏身がⅠb類である。受部径は13cm~16cmの間にある。かえりは、厚く、端部を丸く仕上げるものに005、014、003、006があり、薄く、端部を尖らせるものに011、007がある。回転ヘラ削りは $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ 程度の範囲に施される。

坏身Ⅰc類 (80009) 80009はかえりが短く、受部径が12.2cmと小形で受部が外方へ、水平に近く突出する。ヘラ削りは、底部付近に施される。

器台 (80002) 80002は器台の脚部である。裾部上位に二条の沈線をめぐらせる。長方形の透孔は3ヶ所に配される。内外面とも回転ナデ調整である。

漢道理土出土の土器 (Fig.31) 80035、80036、80040の3点は、漢道清掃中に埋土から出土した完存品である。036は坏身Ⅰb類、035、040は坏身Ⅰc類である。

② 鉄器 (Fig.32 PL.32)

鉄器には、馬具、刀装具がある。

刀装具 80101は、鍔金具である。長径5.7cm、短径4.7cmの倒卵形である。刀身を通す中央の孔は長径2.7cm、短径1.9cmである。孔に向かって次第に薄くなる。80003内の破片と埋土中の破片が接合したものである。80102は、鞘金具である。長径2.6cm、短径2.1cm、長1.8cmの筒形である。厚さは2mmである。内面に木質が残る。80014内から出土した。80103、80112は、釘である。用途は不明であるが、80114内から鞘口金具とともに出土した所から見て、刀装に用いられたものではないだろうか。木質が残っている。

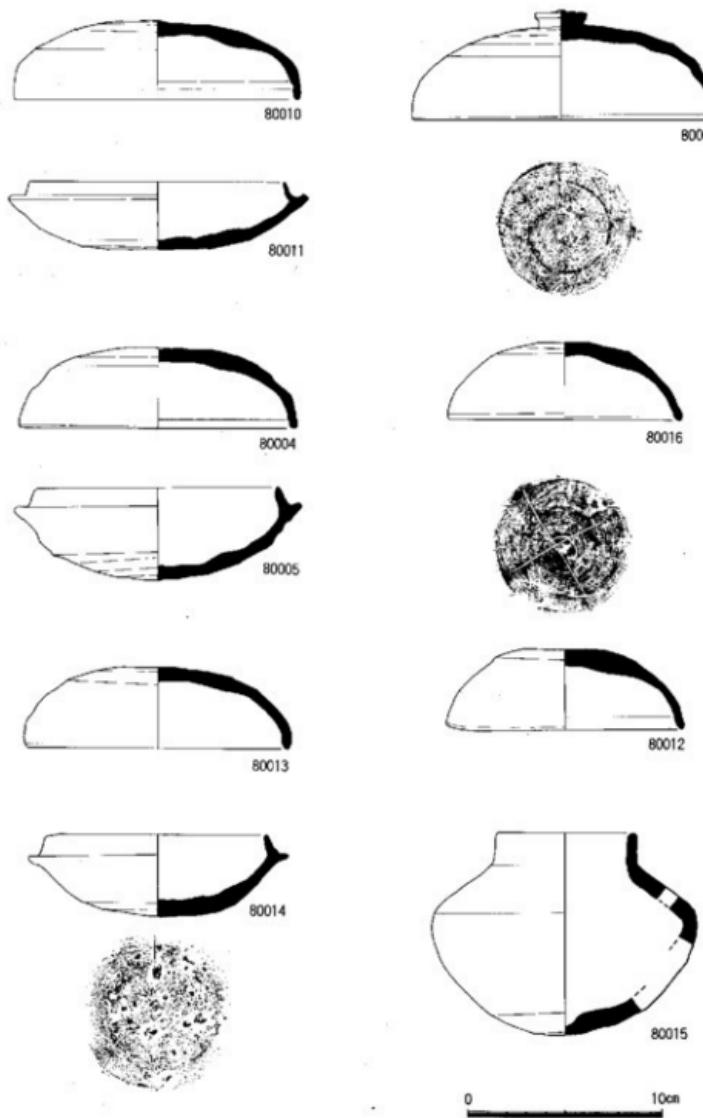


Fig. 30 8号墳出土遺物実測図(1) (1:3)

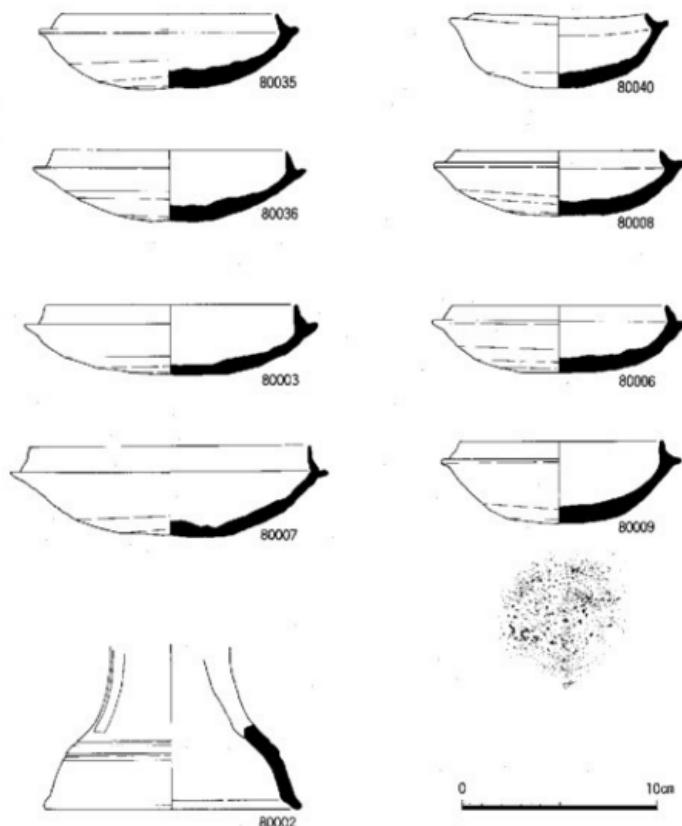


Fig. 31 8号墳羨道出土遺物実測図(2)(1:3)

馬具 80104~80112は、すべて鎧金具の部品と考えられる。

80104は、木製壺鎧の縁金具である。兵庫鎖がとりつく頂部は、断面円形で、鎧本体にとりつく部分は薄くなり、3ヶ所を鋲留する。縁金具は側面のみで、底面には向らない。端部は健形に折れ曲がる。左側の湾曲は本来のものかどうかは不明である。頂部は80004、右側は80003と80007の破片が接続。左側は、80003内の出土である。

80109も、頂部が断面四角形で両側が薄くなり、目釘穴があく。木製壺鎧の縁金具と思われる。

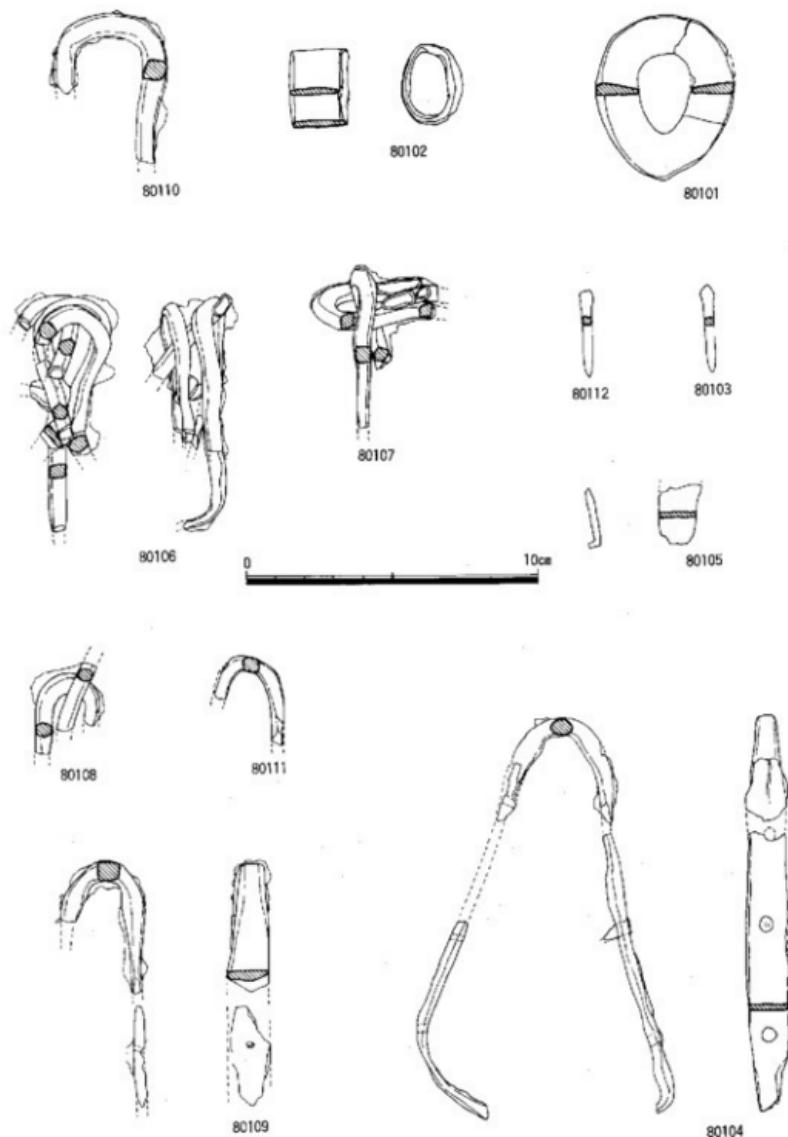


Fig. 32 8号墳出土遺物実測図 (3) (1:2)

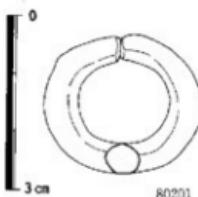


Fig. 33 8号墳出土遺物実測図

(4) (1:1)

溝道埋土内の出土である。80105は、薄い鉄片で、鍵形に折れ曲る。木製壺錠縁金具の端部と思われる。

80106、107、108、111は、兵庫鎖である。106、107が二連つないでいるのはわかるが、全部で、何組、何連分であったかは不明である。106から知られる一連分の長さは、約8 cmである。80110は、兵庫鎖片にしては大形で、鉄質もよい。鉄具の一部と思われる。

溝道部出土の鎧金具は、縁金具が一組あることから、元來左右一組そろっていたと思われるが、兵庫鎖、鎧具は一組分しか出土していない。また、出土状況も、同一個体がいくつかに切断され、別個の須恵器に入れられているという特異な状況である。

③ 装身具類 (Fig. 33 PL.33)

閉塞敷石面から耳環が一点出土した。内径1.5cmの銅胎である。金箱の遺存は見られない。銹化が著しい。

⑤ 溝道出土遺物

① 出土状況 (Fig. 34 PL. 19-2)

溝道開口部から若干北へ湾曲し、谷筋に向かう溝道から、多数の土器片が出土した。その多くは須恵器であるが、土師器（擬須恵土師器）も一点出土している。また、耳環、小玉も各一点出土した。

出土状況は、2個の大甕破片を中心に東西二群に分けられる。東群は、80041の人甕を主とし、その周辺に他の器種が散乱している。西群は、80043を主とし、やはりその周辺に他の破片が散乱している。出土した土器は、完形品に復原できるものも含めて、すべて破碎されており、しかも破片の散布状況、接合関係から見て、土圧等の自然要因で、完存品が破碎されたとは考えられない。むしろ、最後に、使用した土器を破碎し、埋納（？）するという儀礼を伴う墓前祭祀が行われた跡と考える方が妥当なのではないだろうか。

土器片の接合関係を少し詳しくみてみよう。接合関係の明らかな破片はわずかであるがそのうちの大半は、一群内で接合している。しかし、例えば80027などは、脚部が東群に、坏部が西群内にある。そして80044、80043の二つの甕の破片は、それぞれ両群にわたっている。そうしてみると、東西両群は、例えば廃棄の単位など、積極的な意味を付与できるものではないと考えた方がよさそうである。西群は、東群から流れたものかもしれない。

出土した土器の器種には、高坏蓋、坏蓋、坏身、甕、長頸甕、直口甕、高坏、甕がある。

② 土器 (Fig. 35, 36, 37, 39 PL. 27, 28)

器種別に、出土土器について述べていくことにする。

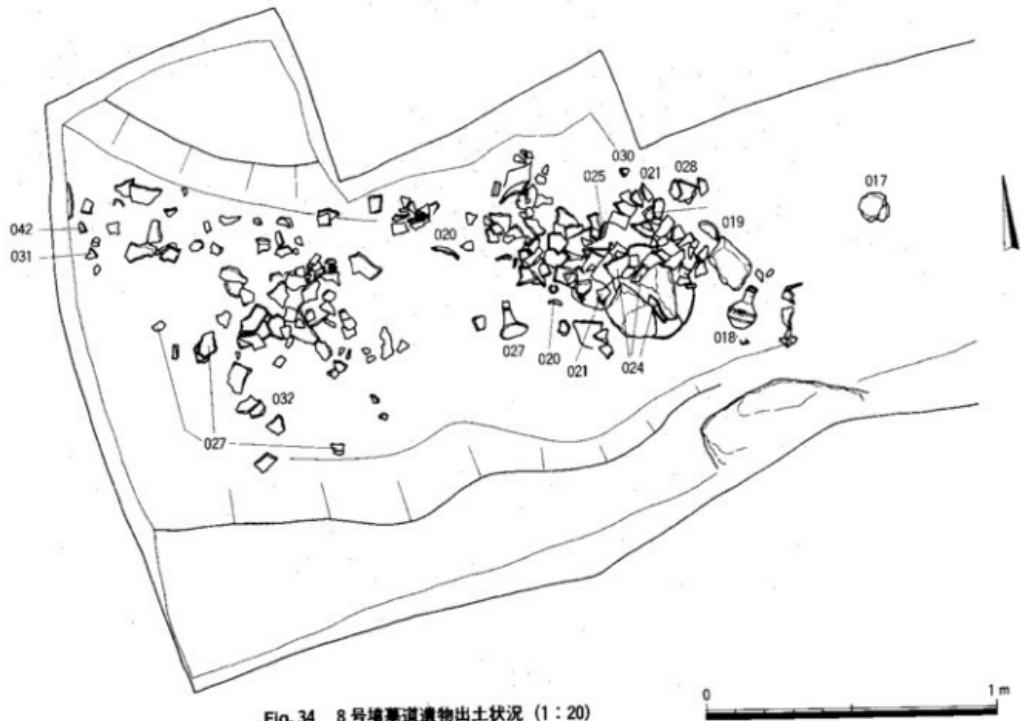


Fig. 34 8号填墓道遺物出土狀況 (1:20)



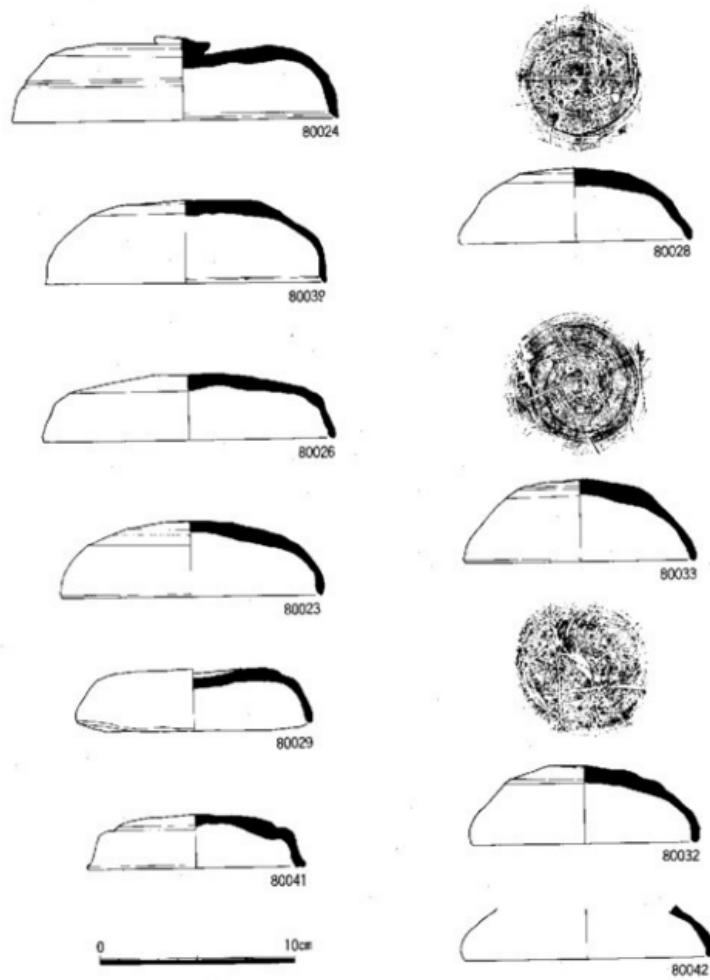


Fig. 35 8号墳墓道出土遺物実測図 (1) (1 : 3)

高坏蓋 (Fig. 35-80024) 80024の高坏蓋は、天井部と口縁部の境に凹線状の段がめぐる。口縁内部にも段がめぐる。回転ヘラ削りは、天井部から $\frac{1}{2}$ 程度に施される。口径は大きく、16.6cmである。

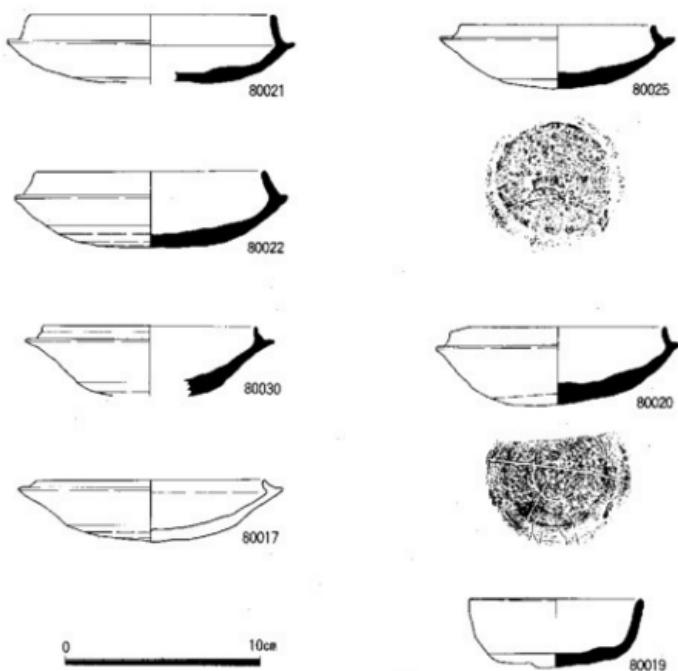


Fig. 36 8号墳出土遺物実測図 (2) (1:3)

杯蓋 II a 類 (Fig. 35-80039) 80039は、径が大きく、口縁内面に段がめぐる。回転ヘラ削りは天井部から $\frac{1}{2}$ 程度に施される。

杯蓋 II b 類 (Fig. 35-80026, 80023) II a 類に比べてやや小ぶりになり、口縁端は丸く仕上げられている。ヘラ削りは、026, 023とも天井部から $\frac{1}{2}$ 程度に施される。

杯蓋 II c 類 (Fig. 35-80029, 80028, 80033, 80032, 80042) 80028は、平坦でやや凹む天井部をもつ。天井部はヘラ切りのまま未調整である。80028, 80033, 80032は、ほぼ同形同大である。やや平坦な天井部をもち、口縁端を丸く仕上げる。回転ヘラ削りは、天井部付近のみに施される。また、これらの土器は、漢道出土の80016, 012とも、ほぼ同形同大で、調整も共通している。また同一のヘラ記号をもつ。この中で032は、やや口縁部が屈曲し、ヘラ記号のX印も天井周縁部に寄って施されるなど、若干趣きが異なる。しかしいずれにしても、それぞれの製作者の間に、極めて近い親縁性を、推測させる土器である。

80041は異形の杯蓋である。口径は小さく、平坦な天井部をもつ。天井と口縁の境に段がある。

口縁端を面取りし、凹線状に凹ませている。

环身 I a 類 (Fig. 36-80021) かえりの立上がりが直に近く、高い。口縁端部は丸く仕上げられている。かえり部と胴部の内面の境には稜が立つ。ヘラ削りは、稜はナデられて明瞭でないが、受部の直下にまで及んでいる。受部径15cmと、大きめである。

环身 I b 類 (Fig. 36-80022) かえりは内傾するが、厚手で、端部は丸く仕上げられる。かえり部と胴部の内面の境は明瞭でない。回転ヘラ削りは、天井から少程度まで施される。

环身 I c 類 (Fig. 36-80030, 80025, 80020) 器形はやや小形になり、受部径12-13cmである。かえりの立上がりは低く内傾し、薄手になる。口縁端部は、丸く仕あげるもの(80025, 020)と、尖らせるもの(010)がある。ヘラ削りは底部付近のみに施され、底部が平坦になる。

环身 II 類 (80019) 平底でかえりをもたない小形の环身である。口縁は直線にのびながらやや外方へ開く。底部は、ヘラ切りのまま未調整である。

土師器环身 (80017) 80017は、土師器の环身である。焼成は良くなく、軟質である。暗赤褐色を呈する。口縁部には、ヨコナデが見られるものの、ロクロを用いたものとは考え難い。胴部内外面は、回転を用いないナデ調整である。形態は須恵器に似せているが、焼成、手法ともに土師器のものであり、いわゆる「擬須恵土師器」である。^{山田}

壺 (80038) 80038は、長頸壺の口縁部である。上方に開きながら外反し、端部付近で再び内湾して直立する。口縁端部はやや尖り気味に仕上げられる。口径10.4cm、残存高6.5cmである。

高环 (80027) 無蓋の高环である。口縁部はやや開き気味に直立し、口縁端部は丸く仕上げられる。口縁部と底部の境に沈線がめぐる。底部下半にも一条の沈線がめぐり、そのすぐ上に、板状工具の小口をおしつけたような压痕がめぐる。环部の調整は、内面と底部の沈線の上までが回転ナデ、沈線の下は回転ヘラケズリが施されている。脚部は柱状部中位に沈線が二条めぐる。そこから緩やかに開き、裾部で外反気味に大きく開く。脚端部は尖り気味に仕上げられ、凹線状の段がついて下方へわずかに突出する。脚部の調整は、絞りの後回転ナデを施している。

甌 (80018, 80034) 甌は2点出土したが、形態はかなり異なる。80018は直線的にやや外方へ開く口縁部をもつ。頭部との境に凹線状の段がめぐる。口縁端部は、尖り気味に仕上げられる。頭部は緩やかにすぼまり、柱状部を形成する。頭部上位1/3程の所に2条、下位1/3程の所に一条沈線がめぐる。頭部と胴部の境は明瞭である。胴部上位1/3の所に沈線がめぐる。ここを最大径として半球形の底部に至る。下位1/3の所にも沈線がめぐる。口縁部と頭部上半部に暗文、頭部中位と、胴部中位に刻目が施される。穿孔は胴部中位にある。回転ヘラ削りが胴部中位から、底部にかけて施される。

80034は、頭部、口縁部が大きく開く。口縁部と頭部の境には凹線状の段がつく。頭部は柱状部をつくりらず、緩やかにすぼまる。胴部はやや扁平で、最大径は胴部中位にある。底部は平底気味である。胴部中位以下をヘラ削りする。

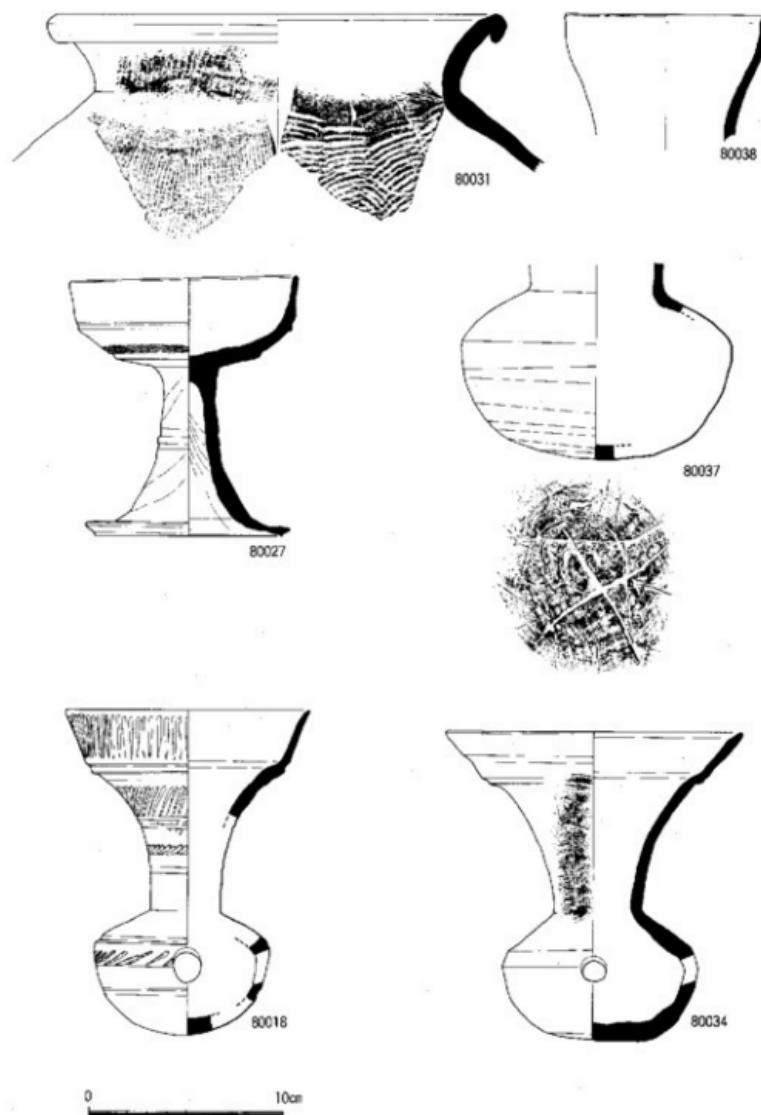


Fig. 37 8号墳墓出土遺物実測図(3) (1:3)

直口壺 (80037) 口縁端部を欠く。短く直立する口縁部に、胴の張る胴部がつく。最大径は胴部上位1/4程で、それ以下に回転ヘラ削りが施される。胴部最大径で14cmである。

甕 (80031、80044、80043) 80031は、端部が折れ曲がって下垂する口縁部をもつ。肩部以下を欠くが、肩が張る球形胴の甕になると思われる。調整は、頸部から肩部にかけて、平行叩きを施し、上からナデをかける。内面には、同心円文の当て其痕が残る。

80044は、口縁端が面取りされ、その直下に、凹線状の段がつく。頸部は緩やかに外反し、大きく外方へ開く。胴部は球形に近い。胴部外面は平行叩きで、その上から上半部にカキ目を施す。内面には同心円文の当て其痕が残っている。

80043は、口縁部を欠く。やや肩の張る胴部になる。底部は丸底である。胴部外面は、平行叩きで、内面には、同心円文の当て其痕が残る。

② 装身具類

墓道から、耳環1個と、小玉1個が出土している。耳環は、内径1.5cmの胴部のみの遺存であるが、金箔がおかれていたものであろう。鋳造が著しい。断面径は短径0.5cm、長径0.8cmである。小玉はガラス製で径0.7cmである。コバルトブルーを呈する。

8号墳からは、他の古墳には見られないほど多量の土器が出土した。ここで、墓道出土土器と、墓道出土土器を比較してみよう。墓道出土土器群と、墓道出土上器群で、共通して多く出土しているのは蓋環である。环蓋は、墓道ではⅡ b 3点、Ⅱ c 2点で、墓道ではⅡ a 1点、Ⅱ b 2点、Ⅱ c 4点と、より後出的に特徴をもつⅡ c類の割合は、墓道の方が高い。つぎに环身を見る。墓道ではⅡ b が4点、Ⅰ b が4点、Ⅰ c が1点で、墓道Ⅰ a が1点、Ⅰ b が1点、Ⅰ c が3点と、これも、墓道の方が、より後出的なⅠ c類の割合が高い。また环身Ⅱ類を含むことも、新しい様相の特徴であるといえそうである。

しかしその一方では、次のようなことも考えられる。环身Ⅰ a類～Ⅰ c類、环蓋Ⅱ a類～Ⅱ c類は、他の古墳の例を見ても、共存幅は長いと考えられる。また、親縁関係にある製作者によって作られたと思われる須恵器が、墓道、墓道の双方から出土している。この环蓋に記されたヘラ記号は、8号墳出土の他の器種の須恵器にも見られるが、8号墳以外には見られない。このことから、墓道供献土器と、墓道供獻土器は、同時に入手されたとも考えられる。以上二つの推論から少なくとも言えることは、次のようなことである。

墓道出土土器は、墓道出土土器と同時期かやや後出する可能性がつよく、少なくとも遡るものではない。これが、供獻の時期を示しているとすると、墓道供獻土器は、埋葬に際して行われたか、ある一定の期間をおいて行われた墓前祭祀の後、使用した土器を破碎したものと考えることができよう。

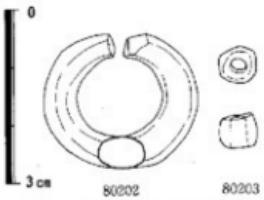


Fig. 38 8号墳墓道出土遺物実測図
(4) (1:1)

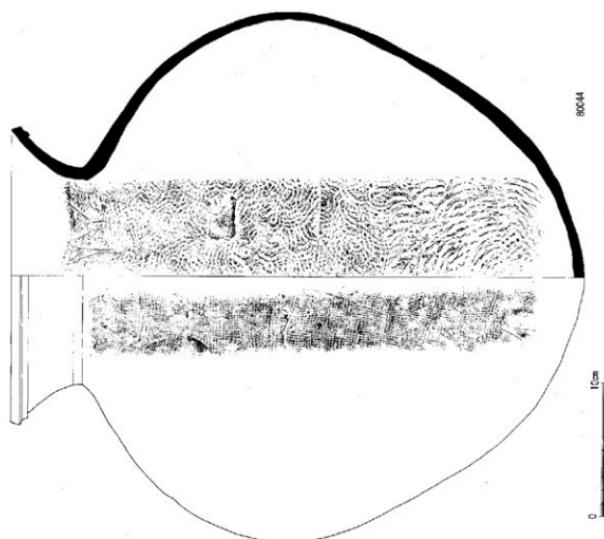
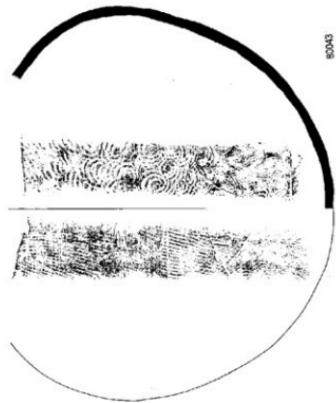


Fig. 39 8号罐盖出土物実測図 (5) (1 : 3)

IV. 小 結

今回の調査は、現況調査を主としたものであったが、数々の興味深い事実が見出され多くの問題を提供した。ここでは、そのいくつかの問題についてまとめ、今後の検討課題として提出することで、まとめてかえたいと思う。

以下の項では、次のような問題について、まとめてみたい。

1. 出土須恵器の分類と年代
2. 石室形態の変遷と、古墳群の形成過程
3. 8号墳の供獻行為について

1. 出土須恵器の分類と年代

羽根戸古墳群E群から出土した土器は、そのほとんどが須恵器で、わずかに土師器も出土している。この項では、各古墳から共通して多く出土している蓋坏（坏身、坏蓋）を中心に考察を加える。

前章の遺物の項で、坏蓋、坏身をそれぞれ類別した。今一度、簡単にまとめておこう。

坏身は、かえりの有無によりⅠ・Ⅱ類に大別され、Ⅰ類をかえりの高さと形を主としてa～cに細分する。Ⅰa→Ⅰcの順でかえりが小さくなる。

坏蓋は、錘、かえりの有無により、Ⅰ～Ⅲ類に大別され、Ⅲ類を外縁・口縁部の形状、口径によりⅢa～Ⅲcに細分する。

細分諸類型間の形態変化の方向は坏身Ⅰa⇒Ⅰcであり、古式須恵器とされるものとの形態的親縁性から坏身Ⅰa→Ⅰcとなる。坏蓋も同様にⅢa→Ⅲcと想定される。坏身と坏蓋の確実なセット関係は8号墳淡道部でみられ、Ⅲb類とⅠb類がセットになる。また、8号墳で、親縁関係の高い製作者を想定した坏蓋Ⅲc類のヘラ記号×を、坏身の中で搜すと80009、025、020が該当し、いずれもⅠc類である。このことから、ほぼ坏蓋Ⅲb類と坏身Ⅰb類、坏蓋Ⅲc類と坏身Ⅰc類の併行が考えられ、漸って、坏蓋Ⅰ、Ⅲa類と、坏身Ⅰa類の併行関係が推定できる。

これらのことと、小田富士雄氏によって先鞭をつけられ、近年更に充実してきている北部九州の須恵器編年を照らすと、坏身Ⅰa、Ⅰb類、坏蓋Ⅰ、Ⅲa、Ⅲb類は、ⅢB期に、坏身Ⅰc類、坏蓋Ⅲc類はⅣ期にあたる。ただ、各類型の存続幅は重複期間が長いと思われ、時間的な概念のより強い「期」を使うのはためらわれる。しかし、「様式」と呼びかえる程、方法論的手続を踏んでいないので、「ⅢB期」「Ⅳ期」をそのまま用いることにする。そして、坏身Ⅰa、蓋Ⅰ、Ⅲa類を主体とする時期を「ⅢB期古段階」とし、6世紀第3四半世紀頃をあて、

环身Ⅰb、蓋Ⅱb類を主体とする時期を「ⅢB期新段階」とし、6世紀後半～7世紀前半に考えておく。そしてⅣ期を7世紀前半とする。年代観は、大まかなもので、重複期間が長いと考えられることは、先述したとおりである。また、环身Ⅱ類、环蓋Ⅲ類はⅤ期、环身Ⅲ類、环蓋Ⅳ類はⅥ期であろう。

2. 石室の変遷と、古墳群の形成過程

Fig.40は、石室の平面図を、集成したものである。9号墳については、福岡県教育委員会の報告書を一部加筆修正して転載した。平面形からは、次の3種に種別が可能である。

I類（4号墳）狭長な長方形プランで、羨道は短いものと思われる。

II類（6、7、9号墳）やや縱長の長方形プランで「ハ」の字形の羨道がつく。

III類（8、3、5、2、1号墳）方形プランに、長く狭長な羨道がとりつく。

これらの石室の変遷の方向は、4号墳が最も堅穴式横口石室との形態的類似を示していることからI→II→III類の順が考えられる。これを、前項の須恵器の年代から検証してみよう。

I類の4号墳は、出土遺物がないが、同類か、やや古手の羽根戸古墳群B-4号墳、羽根戸南古墳群E-4号墳は、II期～III期の須恵器が出土している。

II類の6号墳では、环蓋Ⅰ、Ⅱb、Ⅱc類、环身Ⅰb、Ⅰc類が出土している。古い要素を抽出すれば环身Ⅰb類と、蓋Ⅰ類で、ⅢB期の中に上限が求められ、ⅢB期古段階までは潮りうる。7号墳は环身Ⅰa、Ⅰb、Ⅰc類、蓋Ⅱa、Ⅱc類が出土している。ⅢB期のうちに上限が求められ、古段階までは潮りうる。9号墳は、県報告によれば、环身Ⅰb、Ⅰc、Ⅱ類、蓋Ⅱa、Ⅱb、Ⅲ類があり、上限はⅢB期にある。新段階を大きくは潮らない。

III類の8号墳は、先に述べたように、羨道ではⅠb、Ⅰc類が主体で、墓道では、环身Ⅱ類も含まれる。一括性を評価し、最も新しいもので判断すれば、羨道がⅣ期、墓道が、V期に比定できる。3号墳は环身Ⅰa、Ⅰb、Ⅰc類、环身Ⅱa、Ⅱc類が出土している。ⅢB期古段階に潮る可能性もあるが、新段階におさまる。5号墳は、环身Ⅰa、Ⅰb類、蓋Ⅱb、Ⅱc類がある。Ⅲb期新段階に上限がおさまろう。2号墳は、羨道第一面に伴うⅥ期の土器を除くと、环身Ⅰb類、环蓋Ⅱa、Ⅱb類が出土しており、ⅢB期新段階であろう。1号墳も、环身Ⅰb、Ⅰc類、环蓋Ⅰb、Ⅰc類が主体で、ⅢB期新段階～Ⅳ期に比定できる。

以上のことから、I類石室はⅡ期～ⅢA期、II類石室はⅢB期古段階～新段階、III類石室はⅢB期新段階～Ⅳ期に比定され、須恵器から見た古墳の年代観と、石室の変遷が、よく対応しているといえそうである。

次に古墳の廃絶の時期について考えてみたい。

最終追葬面の明らかな古墳は2号墳と8号墳である。2号墳では羨道床面からⅥ期の遺物が出土している。8号墳では、墓道の遺物がV期と考えられる。1号墳でもV期の遺物が見られ

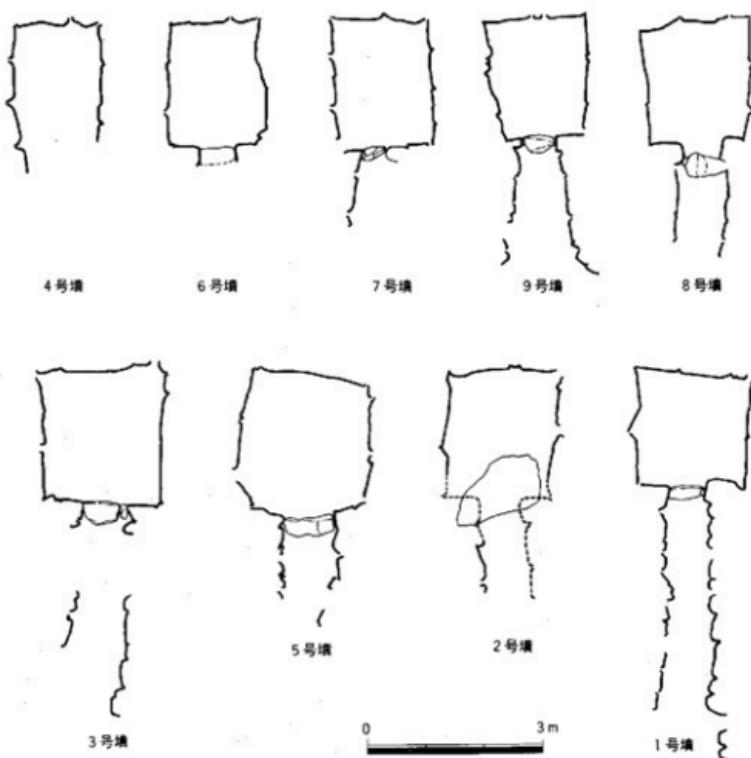


Fig. 40 羽根戸古墳群E群平面図集成 (1:100)

る。これらは古墳群全体を通じて、最も新しい遺物である。Ⅲ類石室の廃絶時期がV～VI期（7世紀中葉～後半）であり、古墳群自体もこの時期には廃絶されるものと思われる。

次に古墳群の形式過程について考えてみたい。

羽根戸古墳群E群は、大きく5群に分けられると考えられる。第1群は、谷奥の一群で、1、2、3、4号墳からなる。第2群は5、6号墳からなる。第3群は、7、8、9号墳である。第4群は10、11、12号墳で、第5群は、13、14号墳であるが、第4、5群については、ここでは触れない。まず、6世紀中頃（ⅢA期）に、第1群に4号墳がつくられる。6世紀後半（ⅢB期占段階）には、第2群、第3群にそれぞれ6号墳、7号墳が作られ、やや遅れて9号墳が

つくられる。6世紀末（ⅢB期新段階）に古墳は急増する。第1群では3、2、1号墳と相次いで築造される。立地から見て、3→2→1の順で築造されたと思われる。1号墳のみが開口方向を違えるのは、最終段階の築造であることが関係しているのではないだろうか。第2群では5号墳、第3群では8号墳が築造される。この時期に、墳丘規模が最大になるようである。7世紀前半（Ⅳ期）では、大半の古墳が廃絶され、残った1、2、8号墳も、V～VI期には廃絶される。各群内の古墳の立地の変遷は、おおむね、谷口側→谷奥側という方向である。

3. 8号墳の供獻行為について

8号墳では、興味深い事実が知られた。それは、墓道内出土須恵器の壺の中に、魚骨と鉄器が入れられていたことである。

魚骨は、付論で、木村幾多郎氏が述べておられるように、淡水産の硬骨魚である。頭骨が見られないものの、腹椎、尾椎があることである。元来一匹であったか、あるいは切身であったものと考えられる。食物供獻については、小林行雄氏の論考以来注目されているところであるが、今回集成して検討を加える余裕がなかった。今後の課題としている。関連資料を御存じの方は、御教示頂ければ幸いである。

また須恵器内から出土した鎧金具は、10数点に切断され、別々の蓋壺の中に入れられているという特異な出土状況である。また、やはり須恵器壺内から出土した刀装具類も異様である。刀装具だけ取りはずし、目釘まで抜いて、収納したのは、どういうわけであろうか。刀身はどうしたのであろうか。

一つの解釈としては、墓道出土の土器と同様、破碎すること自体に意味があるという考え方がある。破碎した上、収納するのは、何か封じ込めたかのような印象も与える。

これについても、類例を調べて検討する余裕がなかった。関連資料を御存じの方は、是非御教示願いたい。

註(1) 浜田信也編「羽根戸古墳群」福岡県文化財報告書第57集 1980

註(2) 山崎純男 柳沢一男 浜石哲也編「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財報告書第41集 1977

註(3) 大沢正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」日本製鉄史論集 1983

註(4) 本課加藤良彦氏の御教示による。

註(5) 本課山崎龍男氏の御教示による。

註(6)・(7) 橋口達也編「野間窯跡群」(福岡県教育委員会 1982)における分類による。

註(8) 年代観については、吉留秀敏編「堤ヶ浦古墳群」(福岡市教育委員会 1987)を参考にした。

付編 8号墳羨道内出土土器内より検出された魚骨について

佐賀大学非常勤講師 木村 幾多郎

古墳石室内より、食物が残存して検出される例は珍らしい事ではないにしても、そう類例の多いものではない。本報告例は、蓋付の杯の内部に魚骨が残存していたもので、後世の持込みによる残存とは考えられないものとして好事例に属する。

骨の検出された杯は、羨道部閉塞石と玄門の間に置かれた須恵器群の中の1つで、蓋が被つた状態で出土している。他の杯には一個の鉄鋸が割られ、その破片を分けて入れられており、これら一群の須恵器には、埋葬儀礼に伴う行為の一端が残されているものと考えられる。検出された骨もその文脈のなかで考える必要があるといえる。

骨の検出状況

杯に蓋が被つていたといつても、内部には毛根のようなものがひろがっており、しかも骨と区別できないような状況であった。明らかに毛根と思われる物を除去し骨だけをそのまま残した。骨の配列状況は原位置とは思われず、杯の底にかたまたま様子を示している。

残存していた骨

骨は脆く取り上げて観察することは不可能で、出土状況のまま観察せざるを得なく詳細は不明である。残存していた骨は魚骨で、他の動物の骨は含まれていない。骨種は脊椎骨及びそれに付随する棘であり、他の部位は確認できない。脊椎骨の保存状況をみると頭部骨格のみ消失したとは考えにくいことから、少くとも頸部は切り離なされて、本米杯中には納められなかつたものと思われる。脊椎骨に腹椎・尾椎が含まれているが、同一個体のものとしてつながるのかは確認できない。椎体の形態からすれば、同一種のもと思われる。現在確認できる脊椎骨の数は10個であるが、骨の下にさらに存在する可能性はある。椎体を計測できた個体が2個あり、いずれも腹椎で、(a)椎体長(CL) 6mm、椎体高(CD) 5.5mm、(b)CL = 4.5mm、CD = 4.0mmである。魚種は脊椎骨の保存状況が悪く確定しがたいが、その特徴はコイあるいはフナに類似している。

観察できた事柄は以上であるが、これらの骨が本来どのような状態で杯の内に納められていたか問題となってくる。杯の口縁内径は、13.1cmで、無理に魚体を折りまげないとすれば、最大13cm程度の長さの切身を納めることができると。10 + α 個の脊椎骨が同一個体のものとした場合、単純に椎体長(6~4.5mm)を10倍すると6cm弱の切身ということになる。腹椎は中位から後方、尾椎は尾柄に近い部分がみられ、頭部を切り離し、尾部までそろっていたと推定することは可能であるが、確認個体数が10個では、全脊椎骨数の5%程度しかならない。反対に、残存椎体長を平均5mmとして、杯の内径13.1cmを割ると27.6となり、脊椎数は28個前後となり、コイ34個、フナ31個に近くなる(6~3個の誤差は頭部の切り離し方によって異なる)。以上のことから、強いて推定すれば、体長20cm程の魚の頭部を切り離した切身を杯の中に納めたと推定できる。

以上の魚骨の他に、杯の付近より貝殻の小破片が検出されている。真珠光沢を持ち薄層が剥離しやすい。種名は明らかにしがたいが、残されたカーブからすれば、マガキに近いといえる。剥離がすんでおり、カワシンジュガイなどの淡水産貝類の可能性ものである。検出状況からして、供獻されたものであるかは不明である。

おわりに

さて本例のような事例は、少いながらも知られており表の通りで、韓国南部(新羅・伽耶)の事例も含めて表とした。これに関する詳細は別に述べるとして、読みとれる事項を列挙して結びとする。

韓国 手元の資料の関係か慶北地方の事例しか選び出せず、百濟地域での存在は確認できな

かった。そのうち新羅地域では、石槨内の埋葬木槨外頭部側遺物群の下位にアワビや卵殻を入れた土器が置かれており、伽耶地域では、古墳の主槨ではなく墳丘上につくられた他の石槨内に納められ、状況の判明している例では、ほぼ東西方向の石槨の東側頭部側に小槨をつくり、その内に入れられた土器の内に魚や貝が入れられている。両地域の石槨の形態は異なるもののいずれも頭部側におかれていることがわかる。

日本 東国山古墳は竪穴式石室内木棺外に入れられた多量の須恵器の内より検出されている。差しあがえにした2体の人骨の両者の頭部に須恵器が納入されているが、動物骨の遺存していた土器の位置については不明である。石室内の須恵器の状況は、韓国の伽耶（新羅）地域のものに類似しているといえる。横穴式石室でも古い例（中宮1号、上総金鈴塚例）は、石室内石棺又は人骨埋葬部と奥壁の間、つまり頭部側の土器群の内より検出されている。斎藤忠氏が“生活にそなえようとする目的のもの”とする土器群である。横穴式石室・横穴の6世紀以降の例は、漢道又は墓道部に置かれた土器内に検出されている。この変化は、儀礼の起源は、新羅伽耶地域からの教示とみられるものの、日本国内での食物供養の儀礼の変化を示してといえよう。動物遺存体の在り方からすれば、魚の場合頭部を切り落し切身の状態で供献した例（本例・東国山例）、頭部までつけていたらしい例（上総金鈴塚）がある。貝殻のうち巻貝については、調理してあったか不明であるが、二枚貝の場合は、検出時に一対合させていた場合（東国山1号・竹並・上ノ原例など）と、左右バラバラで内面を上にして検出された場合（上ノ原例）があり、後者の例は、調理後供献した例とできる。魚は種名の判明している例からすれば、淡水魚の方に偏りがある。貝は、ハマグリも多いが淡水産のカラス貝も多い。韓国例では、魚はタラ・スズキなど鹹水産、貝もレイシ・サザエなどこれも鹹水産である。日本例との一番のちがいといえば、鳥の例が多い事で、特に天馬塚の卵殻（鶏・キジ）は、新羅の起源神話と関連づけられている。

詳細は別稿で述べるにしても、小林行雄氏の考察されているように“黄泉戸喫”的点から考察する必要があろう。

遺跡地名表（日本）

番号	遺跡名	出土位置	容器	検出遺物				文献
				魚	貝	鳥	その他	
1	羽根田E群8号墳	墓道部（玄門前）	蓋付杯	ゴイカツ（2個以上） 青根付（2個以上）				付近に貝殻小片 1
2	竹並古墳L-40-3 G-2-7	玄室 蓋	須恵器・盤 蓋付杯			ハマグリ（3対）		スッポン 腹甲板・背甲板物 2
3	城ヶ谷15号墳	玄室						イシガメ 腹甲板（自然死） 3
4	本城横穴	土器・高杯			○			4
5	若木山古墳	横穴式石室 蓋付杯 3個			各1個ジラフ			5
6	夜須町	高杯						ウニガイ 6
7	後井3号横穴	蓋付杯 2個			カラスガイ			7
8	中宮1号墳	玄室 奥壁面 蓋付杯	○ 体長30mm以下の小魚					8
9	中宮印達神社裏	須恵器・杯			ハマグリ 7個			9
10	狐塚古墳	須恵器・杯 蓋付杯 1個	○ シのうな大きさ					10
11	東国山1号墳	竪穴式石室 外・土器群	須恵器・杯身	○				11
				+	ハマグリ (左・右対称)			
				+			板	
12	八幡神社古墳	横穴式石室 有蓋・高杯	○					12
13	七ツ塚古墳	蓋付杯			ハマグリ サソリガイ（2個）			13
14	堆代古墳	蓋付杯 4個	カレイ	ハマグリ・アワビ				14
15	二ツ塚古墳	杯			○ 1個			15
16	鹿占墳	杯			○ 1個			16

番号	遺跡名	出土位置	容器	検出遺物				文獻
				魚	貝	鳥	その他	
17	高城東山古墳	横穴式石室床面	蓋付杯		カラスガイ 5個			17
18	高城田横穴式石室	蓋付杯		ハマグリ	11個(弘右台さる)			18
19	高城字古塚	蓋付杯					伊勢エビ(甲殻)	19
20	ジゴ塚古墳	蓋付杯					ウニ殻 2個	20
21	上船金鈴塚	横穴式石室口区	杯	フ	ナ			21
			杯	ウ	ナ	ギ		
			高	杯	ウ	ナ	ギ	
			杯				カラスガイ	
22	上ノ原18号横穴	高城玄門前	蓋付杯(6C後半)	カラスガイ	r3x3(1対合)			25
		24号横穴	高城左側	蓋付杯(6C後半)	ハマグリ	r3x3(3対)		
		50号横穴	高城頭部右上		(5C後半)			ウニ殻
23	筑前土塚古墳	黄道開塞内	瓶	志	3個		底部にホホノキの蟲類	22
24	高城古墳	有蓋高杯					東子形土器品10個	23
25	高城1号墳	大形台付鉢					鉄製釘	24

遺跡地名表(韓国)

番号	遺跡名	出土位置	容器	検出遺物				文獻
				魚	貝	鳥	その他	
1	鹿島山洞34号墳	34SE-3	高杯⑩			3点		①
			高杯⑯	アラ 青鶴点(青鶴青6点)				
			高杯⑮				カニ(2点)	
2	34号墳	準結石面	高杯⑮	小魚 - 3個体			レイシ 78個	
3	35号墳	35NW-2	高杯⑯				サザエ	
4	地山洞44号墳	1号石室					ニワトリ Tib.1	
5	(5世紀)	6号石室					ニワトリ Fem.2	
6		11号石室					ニワトリ Cl. Tl Sec.2 Ham. Tm. Fn.2	
7		14号石室					○	
8		16号石室					ニワトリ Ham. Fem.3. Tm.3	
9		25号石室					ニワトリ	
10		32号石室					ニワトリ (筒骨10個あり)	
11	地山洞45号墳	2号石室	有蓋下垂壺⑩				ニワトリ	
			食器⑨				ニワトリ	
12		6号石室	有蓋高杯②				ニワトリ	
			有蓋高杯⑤	○				
13	鹿島山洞38号墳	第2室	高杯	レイシ (20個以上)				②
			有蓋銀瓶⑩	レイシ				
			有蓋耳付銀瓶⑦	レイシ				
14	東北・慶山郡・杵童洞	?	?	○	○	○	カニ・ウマ・ウシ	4
15	東北・慶州府南	南墳村土内	円底土器		○		歐骨・小形工具	5
			円底土器		○	○	歐骨(含大形瓶) 小形土器	
16	同	桶	高杯	○			種類	
17	東北・慶州市	副非品权威種	鉄釜内板革形土器		複数(ニワトリ) 7個・財布			6
		(天馬塚) 6C初	鉄輪					
			鉄頭		複数 10個分			
			鉄頭		複数 10個分			
18	東北・慶州市	第2室	高杯	ズスキ(青椎骨)		○(動物)		7
19	東北・慶州市	台付長頸壺			アワビ			8
20	東北・慶西面	高杯			○(19個)			9
21	東北・大邱市	大邱2号墳	有蓋壺	複数 青椎骨 5個				10
22	東北・慶州市	1号墳	有蓋壺	○				11
23	東北・慶州市	2号墳			カキ			12
24	東北・慶州市	138号墳	木桶内	長頭理			ニワトリ	13
			高	平			種類	

文献 所在地（日本）

1. 本報告例
2. 福岡県行橋市
3. 福岡県宗像市
4. 福岡県北九州市八幡西区木城堀川 島田寅次郎、1934「福岡県の横穴」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書9、福岡。
5. 福岡県築上郡新吉富村宇野岩木 瑛為歲、1906「珍らしき古墳遺物」考古界6-3、東京。
6. 福岡県朝倉郡夜須町 島田寅次郎、1934「福岡県の横穴」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書9、福岡。
7. 山口県熊毛郡田布施町宿井 弘津史文、1927「周防國熊毛郡上代遺跡遺物發見地調査報告書」(P. 38)。
↑ タクシード 1930「防長原史時代資料」(国版8)。
8. 津山県津市劍戸 近藤義郎、1962「中宮第1号墳発掘調査報告」佐良山古墳群の研究1。
9. 兵庫県竜野市播磨町中臣 小林行雄、1959「黄泉戸喰」『古墳文化論考』に(武蔵誠教示)とあるもの。
10. 京都府長岡京市 文獻9(小林開齊)。
11. 和歌山県和歌山市東中田 金谷克己、1960「紀伊の古墳3—東国山古墳群」。
12. 滋賀県愛知郡湖東町祇園 文獻9(及川幸夫談)。
13. 三重県名張市長尾七ツ塚 三重県教育委員会、1954「三重考古圖錄」(図版78)。
14. 三重県上野市喰代高鷲 文獻13、大西源一、1912「伊賀の遺跡遺物(6)」考古学雑誌2-9、東京。
15. 岐阜県美濃市加茂市古井町二ツ塚 林魁一、1933「蘇陽雜話1」ドルメン2-6、東京。
16. 岐阜県可児郡可児町渡 文獻15に同じ。林魁一、1933「蘇陽雜話3」ドルメン2-12、東京。
17. 岐阜県海津郡羽島村字庭田 円満寺 林魁一、1933「蘇陽雜話2」ドルメン2-9、東京。
18. 爽舞県大山市 文獻15に同じ。
19. 愛知県 斎藤忠、1961「理葬の儀礼」日本古墳の研究。
20. 石川県加賀市作見町富坂 上田紹、1922「加賀能登の古代遺跡」石川県史蹟名勝調査報告1。
21. 千葉県木更津市長須賀 真信夫、1951「自然遺物 金銅鏡古墳出土生物遺存体の古生物学的調査」上総金銅鏡古墳(千葉県教育委員会)。
22. 福岡県嘉穂郡桂川町 川上市太郎、1935「筑前王塚古墳」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書11。梅原本治・小林行雄、1940「筑前嘉穂郡王塚渡瀬古墳」京都帝國大学文学部考古学研究報告15。
23. 愛知県美濃市小鷹野新田 清野謙次、1949「古墳から発掘せられた土製素朴類似品(模造と鋳と巣子)」人類學雑誌60-3、東京。若林勝邦、1986「斎堂に入りしまま発見されし品」考古学会雑誌1-1、東京。
24. 愛知県名古屋市熱田区 斎藤忠、1961「理葬の儀礼」日本古墳の研究、東京。
25. 大分県中津市上ノ原 未報告(村上久和氏の教示による)

文 献 (韓国)

1. 金鍾徽、1981「高靈池山洞古墳群 32-35号墳・周辺石碑墓」啓明大学校博物館遺跡調査報告1・大邱。楊洪準、1981「高靈池山洞古墳에서出土之動物遺骸에對付考察 一大邱之古墳에서發掘之動物遺骸에關하여」高靈池山洞古墳群。
2. 尹容顯、金鍾徽、1979「大伽耶古墳発掘調査報告書(44、45号古墳)」高靈郡。楊洪準、1979「池山洞44号古墳出土動物遺骸에對付考察」大伽耶古墳発掘調査報告書。
3. 啓明大学校博物館、1988「開館10周年記念 星州旱山洞古墳特別展圖錄」。
4. 鄭永和、1988「慶山林宝宅地開発地区内慶山古墳発掘調査経過」慶南考古学5、釜山。
5. 文化公報部文化財監理局、1976「慶州皇廟第98号古墳(南墳)発掘報告」44号。
6. 文化公報部文化財監理局、1975「天馬塚 慶州市皇廟第155号古墳発掘調査報告書」44号。
7. 斎藤忠、1937「慶州皇廟第109号皇廟吾里14号古墳調査報告」昭和9年度古墳調査報告書第1冊。
8. 梅原未治、1932「慶州金鉢塚銅鏡塚発掘調査報告」大正13年度古墳調査報告第1冊。
9. 文獻7中の記述。
10. 尹容顯・金英夏、1966「仁洞・不老洞・高靈古街古墳発掘調査報告」慶北大学校博物館叢刊2。白甲鑑、1966「古墳出土之動物遺骸에關한報告」仁洞・不老洞・高靈古街古墳発掘調査報告。
11. 文獻10に同じ
12. 文獻10に同じ
13. 金載元・金元龍、1955「慶州路西里 4286年発掘調査報告雙床塚・馬塚・138号墳」
(国立博物館古墳調査報告2)

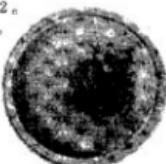


Fig. 41 8号墳出土魚骨

土器観察表

須恵器杯身

Fig.	No.	類	口径	器高	胎土	焼成	色調(内、外)	記号	品種	出土地点
6	10024	Ia	12.0	4.0	砂粒多	良	褐色 暗灰色		右	玄室内～後遺埋土
	10010	Ib	10.4	4.5	*	*	*	左?	*	
	10013	*	12.2	4.8	*	*	外よりやや暗い褐色、灰色	右?	*	
	10022	*	11.6	*	*	*	やや暗い灰色		*	
	10031	Ic	10.0	3.4	*	やや軟	明赤褐色、明灰色	○	右	玄室内
	10002	*	11.0	4.0	*	軟	淡灰褐色、淡褐色		*	後遺
	10003	*	10.1	3.1	*	やや軟	明赤褐色、灰色	○		玄室内～後遺埋土
	10030		11.6	2.9	*	良	暗青褐色			*
	10021		12.6	2.2	微砂粒多	*	暗灰色			*
10	20006	Ia—Ib?	口径14.8 深径13.3	10.0	3.6	砂粒多	*			後遺～玄室内埋土
	30003	II								*
15	30006	Ia	13.0	*	*	*	灰色、褐色			後遺(閉塗内)
	30002	Ib	11.0	4.0	*	*	褐色	右	*	
	30003	*	12.4	3.9	*	*	暗褐色		*	
	30007	Ic	7.8	*	*	*	深褐色	○		
19	50003	Ib	8.2	*	*	*	灰色	右		後遺～玄室内埋土
	50002	IIa	11.3	*	*	*	灰色、淡灰色	左	*	
24	60007	Ib	口径15.6 深径15.1	2.8	*	*	灰色、暗灰色			墳丘表探
	60008	Ic	口径15.6 深径15.2	3.5	*	*	灰色、淡褐色	○?		*
25	70008	Ia	13.8	5cm弱	砂粒若干	*	灰色、暗灰色	右		玄室内埋土
	70007	Ib	15.6	4.9	砂粒多	*	灰色			*
	70006	Ic	11.8	3.8	*	*	暗褐色			*
30	80005	Ib	12.4	4.8	*	*	灰色	右		閉塗内
	80011	*	13.1	3.2	*	*	*		*	
	80014	*	口径17.4 深径17.5	4.2	*	*	暗褐色			*
31	80003	*	12.4	3.6	*	*	灰色	右	*	
	80006	*	11	3.5	*	*	淡褐色、灰色		*	
	80007	*	14.4	4.6	*	*	貴灰色、灰色	左	*	
	80008	*	10.5	3.4	*	*	淡褐色	右	*	
	80036	*	12.0	3.7	*	*	灰色、黃褐色		*	
	80009	Ic	10.3	4.2	*	*	灰色	○		後遺(閉塗外) 閉塗内
	80035	*	11.2	3.9	*	*	暗褐色、黃褐色	右		後遺(閉塗外)
	80040	*	8.9	3.8	砂粒若干	*	灰色			*
35	80041	?	11.0	2.8	*	*	*			
36	80021	Ia	12.4	4	微砂粒多	*	黒褐色、灰色			墓道
	80022	Ib	11.8	4	砂粒多	*	灰色			*
	80020	Ic	11	4	*	*	灰色、暗褐色	○		
	80025	*	12	3.3	粗砂粒多	*	暗褐色、黒褐色	○		後遺(閉塗内右壁面)
	80030	*	11.0	3.7	砂粒多	やや軟	赤褐色、暗褐色			後遺部(右壁際)
	80019	II	8.8	3.5	*	良	灰色、暗褐色			墓道

須恵器・杯蓋

Fig.	No.	類	口径	器高	胎土	焼成	色調(内、外)	記号	品種	出土地点
5	10007	IIa	15.0	2.9	砂粒多	良	暗灰色、やや暗い灰色	左		玄室内～後遺埋土
	10005	IIb	13.4	4.3	*	*	灰色、暗褐色	*		*
	10011	*	14.8	4.4	*	*	灰色	右		*

Fig.	No.	類	口 径	器高	胎 土	焼成	色調(内、外)	△記号	口 M點方	出 土 地 点
5	10012	II b	13.0		砂 粒 多	良	暗褐色		右?	玄室內～後造埋土
	10023	+	14.0	4.4	+	*	暗灰色	○	右	*
	10025	+	14.6		+	*	灰色、暗灰色		*	*
	10004	II c	12.6	3.6	+	*	やや暗い灰色	○	*	*
	10006	+	11.8	3.7	+	*	暗灰色	○	*	*
	10009	+	12.0		+	*	*			*
	10014	+	11.4		+	*	やや紫味のつよい灰色			*
	10015	+	12.4	2.75	+	*	淡灰色、灰色			*
	10019	III?	13.4	1.4	+	やや軟	暗灰褐色			*
	10016		12.8	2.7	+	良	淡灰褐色			*
10	10017		15.4	2.7	+	*	淡青灰褐色、淡黄灰褐色～黒褐色			*
	10018		14.2	1.7	+	*	灰色			*
	20006	I a	13.6		+	*	暗灰色	右?		*
	20005	II b	13.6	4.5	+	*	素灰色、暗灰色	右	後造～玄室内埋土	
	20007	II	11.8	4.5	微砂粒若干	*	灰色			*
	20010	II	12.8	2.2	砂 粒 多	*	灰褐色の強い暗灰色、暗灰色	左	後造付近埴丘表探	
	20008	IV	12.8	1.7	砂 粒 多	*	淡灰色、やや暗い灰色		後造	*
	30001	II a	13.4	4.2	+	*	灰色	右?		*
	30004	+	15.4		+	*	暗灰色	左	後造(閉塞内)	
	30012	II b	13.8		微砂粒若干	*	*			*
15	30005	II c	6.6	3.9	砂 粒 多	+	青灰色、淡黄灰褐色	右		*
	30013	+	12.8	4.0	微砂粒多	*	淡灰色、灰色			*
	30014	+	13.6	3.1	砂 粒 多	*	淡灰色、灰色			*
	50004	III b	12.4	3.9	+	やや軟	灰色	左	後造埋土	
	50001	II c	11.6	3.1	+	良	素灰褐色	右?	後造～玄室内埋土	
	60001	I	13.4		+	*	暗灰色			*
	60002	I b	14.8		+	*	淡褐色			*
	60004	II	14.7	2.6	微砂粒若干	*	やや灰色の強い青灰色		後造埋土	
	60005	+	14.8	2.8	砂 粒 多	*	灰色		玄室内埋土	
	60003	II c	14.2	3.0	+	*	灰色、黃灰色		閉塞面上	
26	70005	I b	14.4	5cm弱	砂 粒 若干	*	灰色、淡灰色		玄室内後造埋土	
	70002	II a	15.2		+	*	淡灰色、灰色		埴丘表探	
	70003	+	15.8		砂 粒 多	*	灰色	右	*	
	70009	II c	12	4.1	+	*	淡褐色			
	70010	+	11	3.1	微砂粒多	*	暗灰色	○	後造埋土	
	80004	II b	14.2	4.2	砂 粒 多	*	灰色	左	閉塞内	
	80010	+	14.6	4.1	+	*	*	右	*	
	80013	+	13.4	4.2	+	*	暗灰色	左	*	
	80012	II c	12	4.2	+	*	灰色、暗灰色	○	*	
	80016	+	12	4	+	*	灰色	右	*	
35	80039	II a	14.3	4.3	+	やや軟	内：淡青灰色 外：青灰色、淡黃灰褐色			*
	80023	II b	13.4	3.9	砂 粒 多	良	淡黃灰色	右	墓道	
	80026	+	14.8	3.4	+	*	暗灰色	左	後造部(閉塞内右壁部)	
	80028	II c	11.8	2.8	+	やや軟	暗灰褐色	右	*	
	80029	+	11.9	3.2	砂 粒 若干	良	灰色	左	*	
	80002	+	11.5	4.0	砂 粒 多	*	*	○	後造部(右壁部)	
	80003	+	11.8	4.2	+	やや軟	黃灰色	○	後造(閉塞外)	
	80042	+	12.6	2.7	砂 粒 若干	良	灰色		墓道	
	80024	+	16.6	4.4	砂 粒 多	*	淡黃灰色		*	

須惠器、壺

Fig.	No.	口 径	器 高	胎 土	燒 成	色 調 (内、外)	△□記号	口 外 口 同軸方向	出 土 地 点
6	10027	口徑 8.1	口徑高 5.7	砂 粒 多	良	灰色	○	左	玄室內埋土
19	50005	口徑 8.1 燒成度大徑 15.4	9.6	砂 粒 少	やや軟	淡黃灰褐色	○		便道埋土
26	70001	口徑 12.6 燒成度大徑 12.6	20cm強	砂 粒 少	良	黑色			玄室土
37	80031	22.6		砂 粒 若干	少	灰色			便道部 (右壁際)
39	80043	最大側径 29.6	24.3	砂 粒 多	やや軟	暗灰色	○		墓道
	80044	口徑 22.0 最大側徑 40.0	43.4	砂 粒 少	良	黑灰色、上半一級黃灰褐色 下半一級灰黑色	○		*

須惠器、壺

Fig.	No.	口 径	器 高	胎 土	燒 成	色 調 (内、外)	△□記号	口 外 口 同軸方向	出 土 地 点
24	60006	10.0	2.6	砂 粒 多	良	黑褐色			玄室埋土
30	80015	口徑 7.5 燒成度大徑 10.4	2.6	砂 粒 少	少	暗灰色			閉塞內
37	80037	最大側徑 14.0	10.1	砂 粒 少	少	黑色			墓道 (閉塞外)
	80038	10.4	6.5	砂 粒 少	少	灰色			*

須惠器

Fig.	No.	器種	口 径	器 高	胎 土	燒 成	色 調 (内、外)	△□記号	口 外 口 同軸方向	出 土 地 点
6	10008	高杯	14.4	4.4	砂 粒 多	良	淡灰色			右
30	80001	*	15.8	5.5	砂 粒 少	少	灰色			閉塞內
6	10026	高杯	13.2		砂 粒 多	少	灰色、暗灰色			玄室內埋土
37	80027	*	11.6	13.4	砂 粒 多	少	淡灰色~黑色			便道部 (閉塞內右壁際)
6	10028	壺瓶	3.8		砂 粒 多	少	黑色、暗灰色			玄室內~一次通鑿土
PL.24	30010	*			砂 粒 少	少	灰色			便道 (閉塞內)
10	20001	高台形杯	口徑 12.2 高台 8.6	3.9	砂 粒 多	少	灰色、灰色+灰白色			西道
15	30008	器台	接合部徑 8.8		砂粒若干	少	暗灰色			次通鑿 (閉塞內)
31	80002	*	牌照部徑 13	8cm強	砂 粒 多	少	淡灰色、黑色			閉塞內
15	30009	器台 右側堆?	口徑 12.4		砂 粒 少	少	暗灰色			西道 (閉塞內)
37	80018	壺	口徑 12.6 高台 3.7	16.8	砂粒若干	少	淡灰色			西道
*	80034	*	口徑 15.8 燒成度大徑 10	高台 15.9 頂徑 11.5	砂 粒 多	少	暗灰色	○	左	西道 (閉塞外)

土師器

Fig.	No.	器種	口 径	器 高	胎 土	燒 成	色 調 (内、外)	△□記号	口 外 口 同軸方向	出 土 地 点
36	80017	杯身	口徑 11.6 安徑 13.6	3.1	砂粒若干	少	赤褐色			墓道
26	70004	壺	12.8		砂 粒 多	良	灰褐色、暗灰色			玄室內埋土
10	20004	盤	21.0	3.0	砂粒若干	少	丹色			便道
*	20009	把手	最大厚 4.5	長さ 約 5cm	砂 粒 多	良	淡白赤褐色			便道~玄室內埋土

図 版

PLATES



1



2



1



2



1



2



1



2



1



2



1



2



1



2



1



2



1



2



1



2



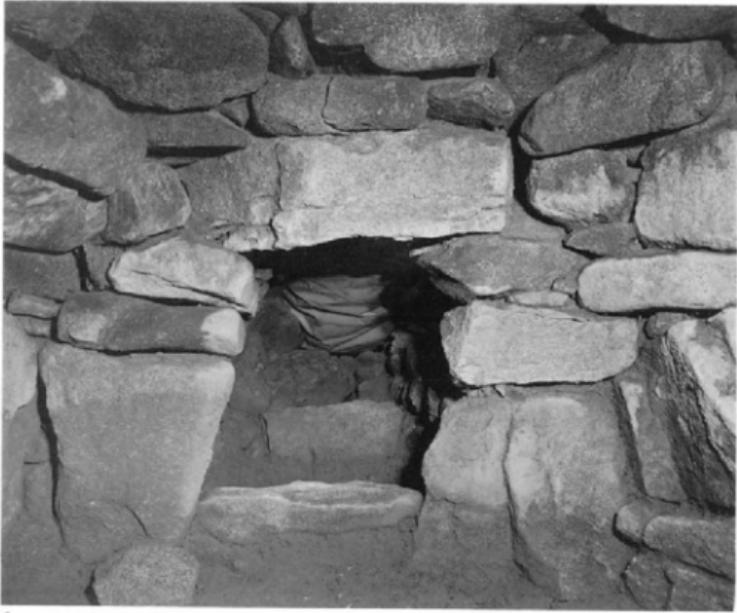
1



2



1



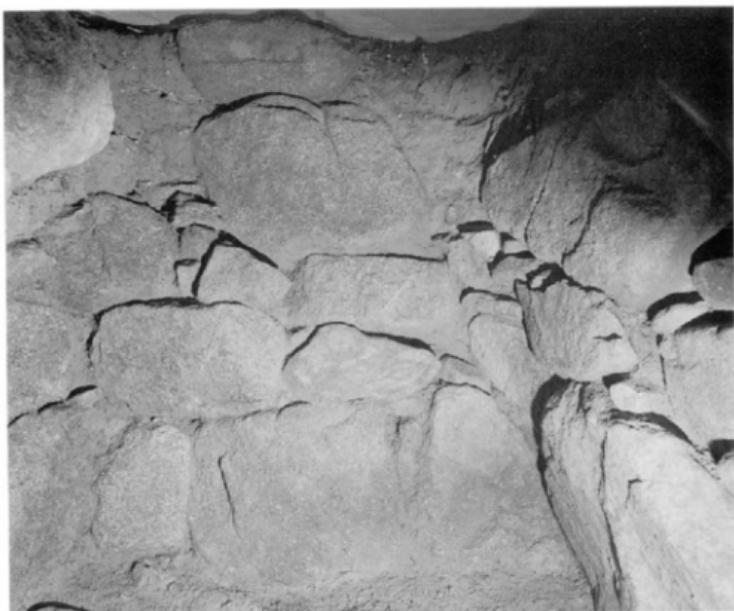
2



1



2



1



2



1



2



1



2



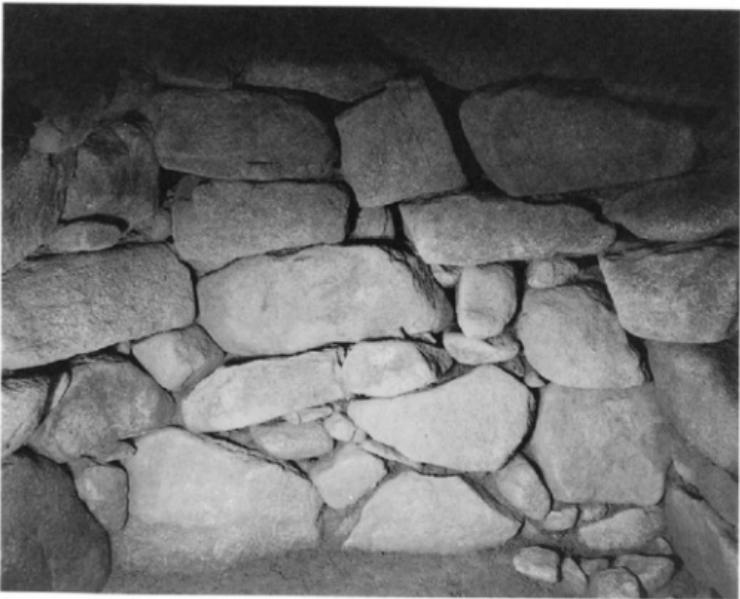
i



2



1



2



1



2



1



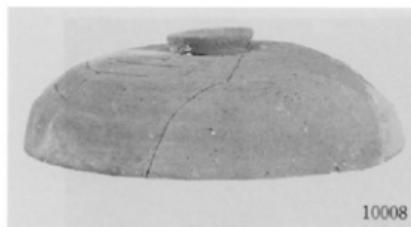
2



1



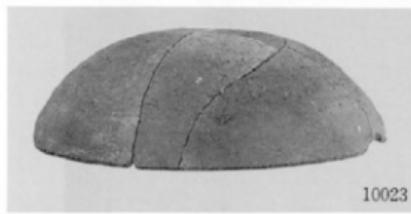
2



10008



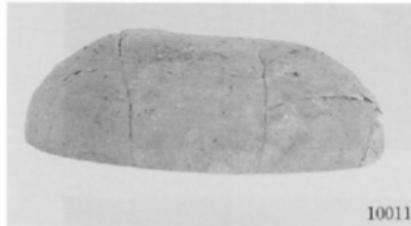
10005



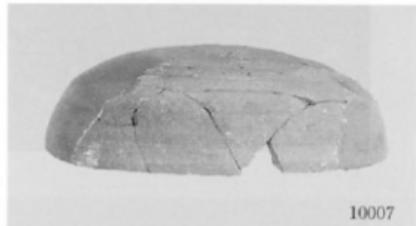
10023



10004



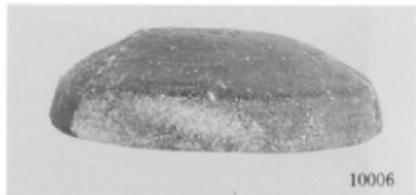
10011



10007



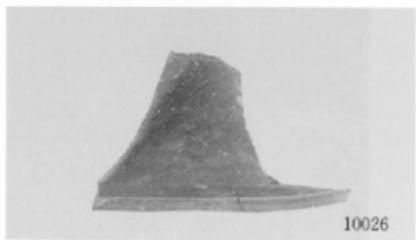
10012



10006



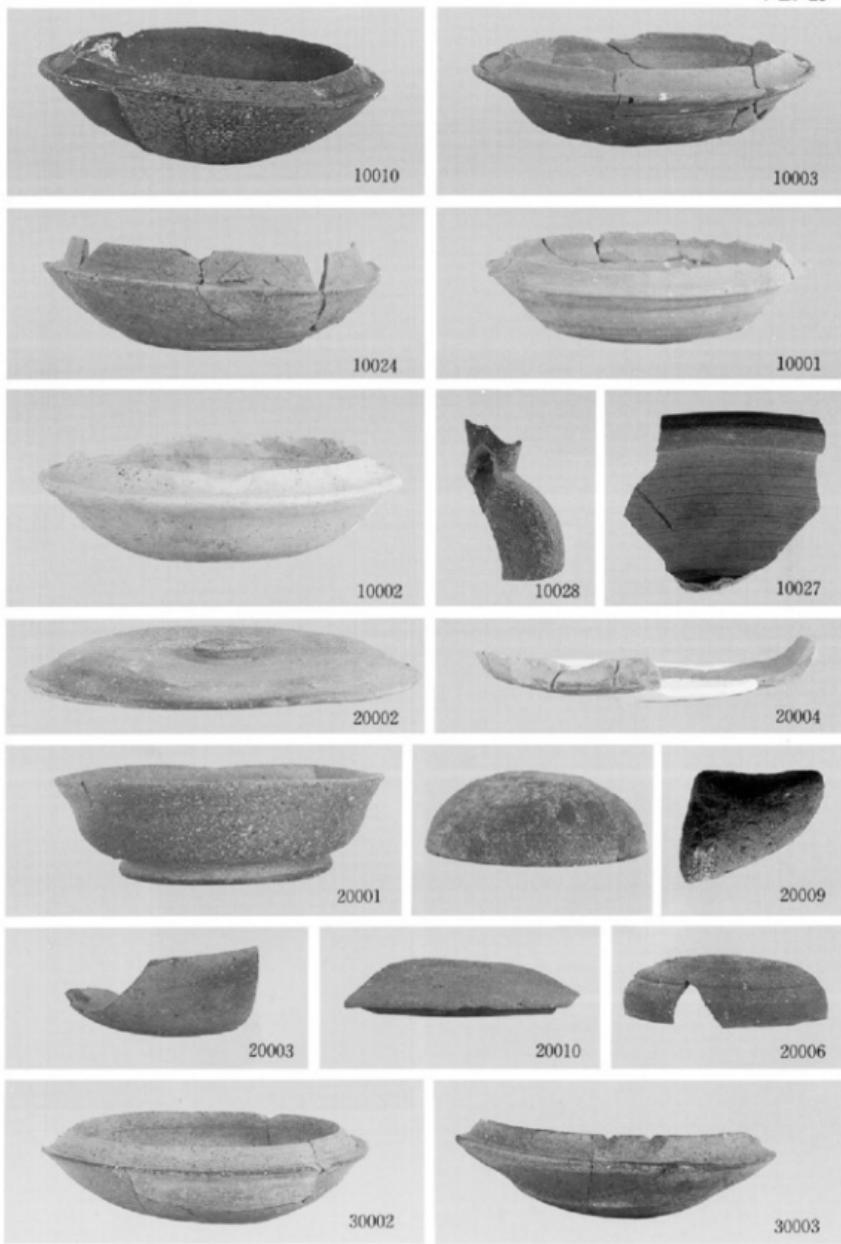
10014

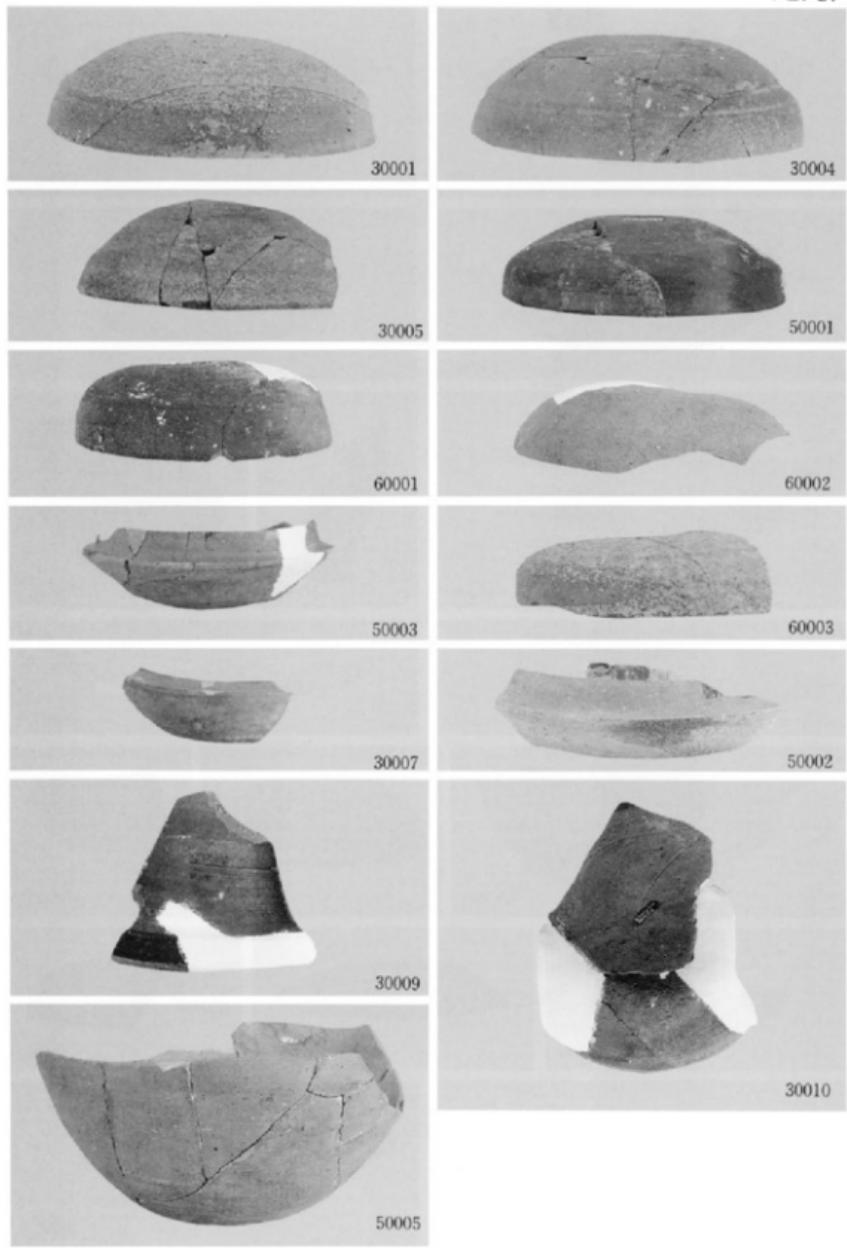


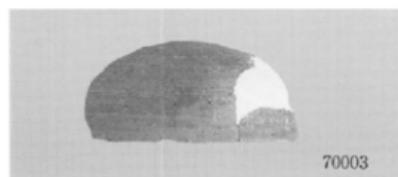
10026



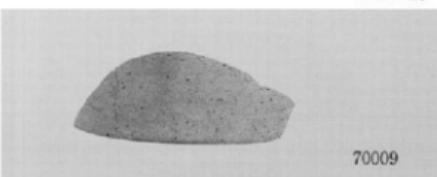
10025



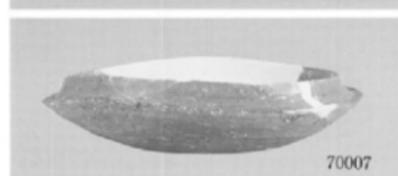




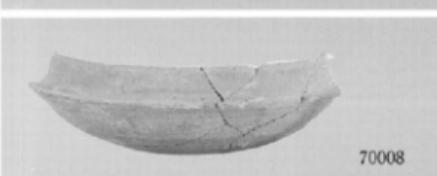
70003



70009



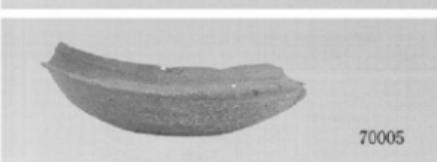
70007



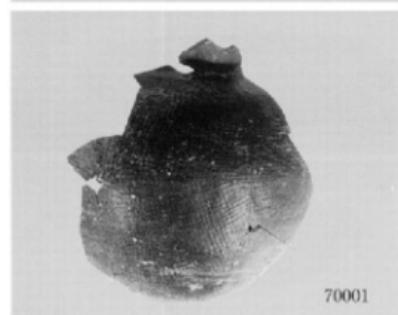
70008



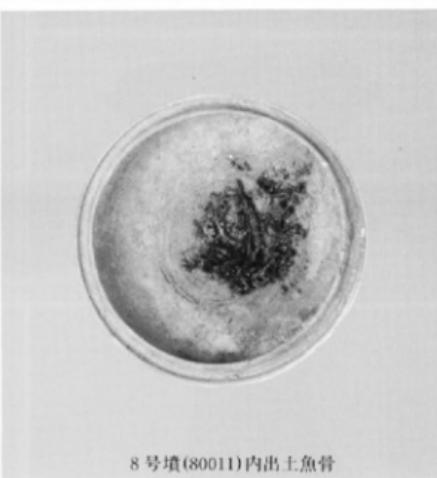
70006



70005



70001



8号墳(80011)内出土魚骨



80004



80005



80010



80011



80013



80014



80001



80012



80016



80003



80007



80009



80006



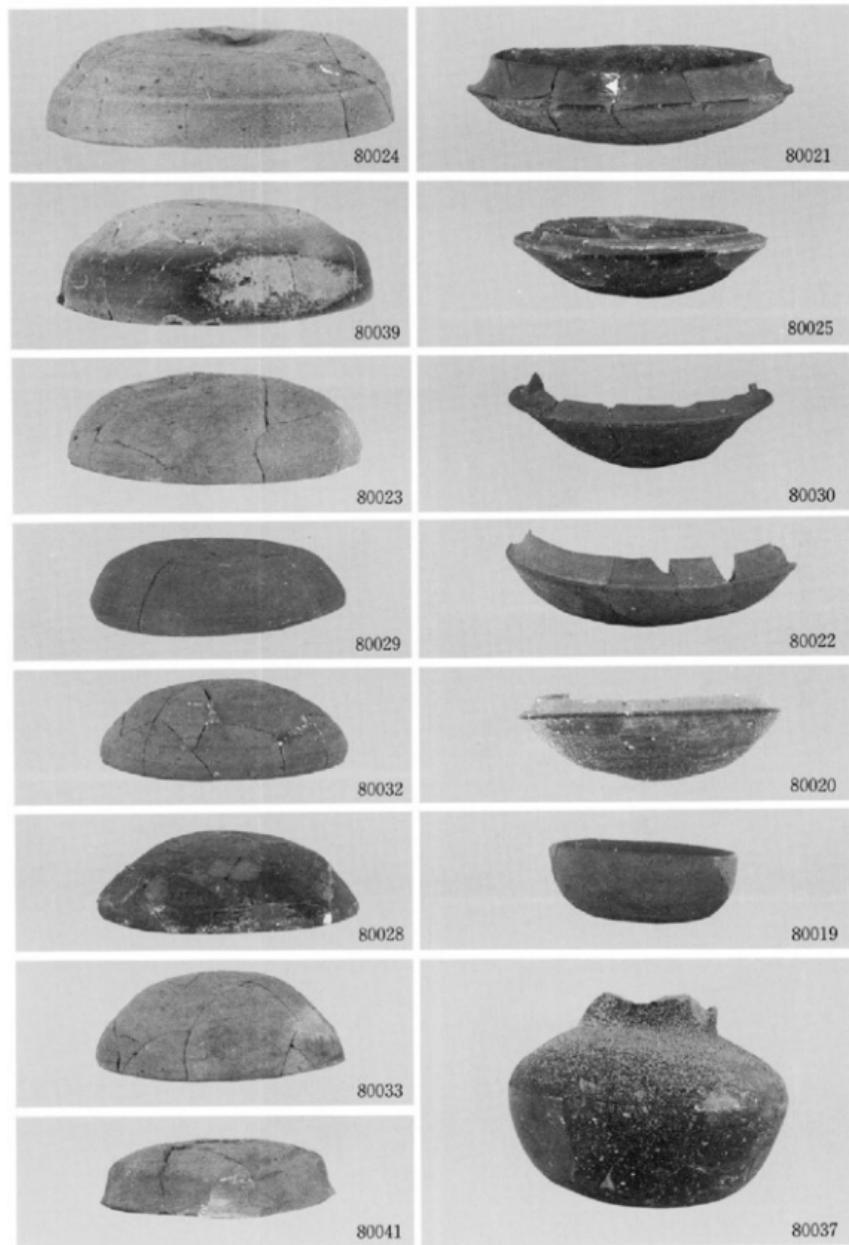
80008



80002



80015





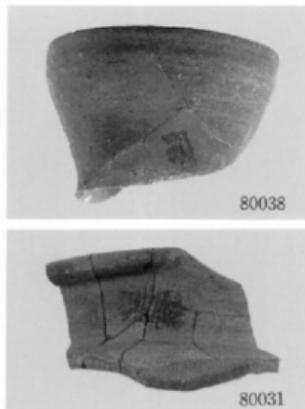
80034



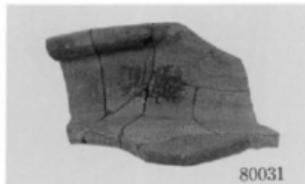
80018



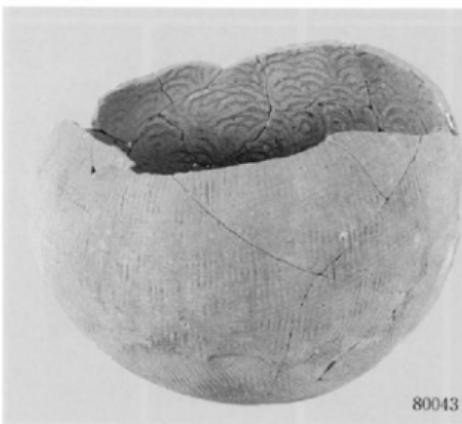
80027



80038



80031



80043



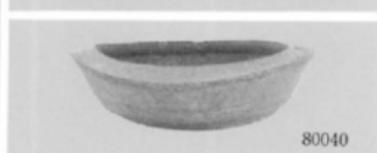
80044



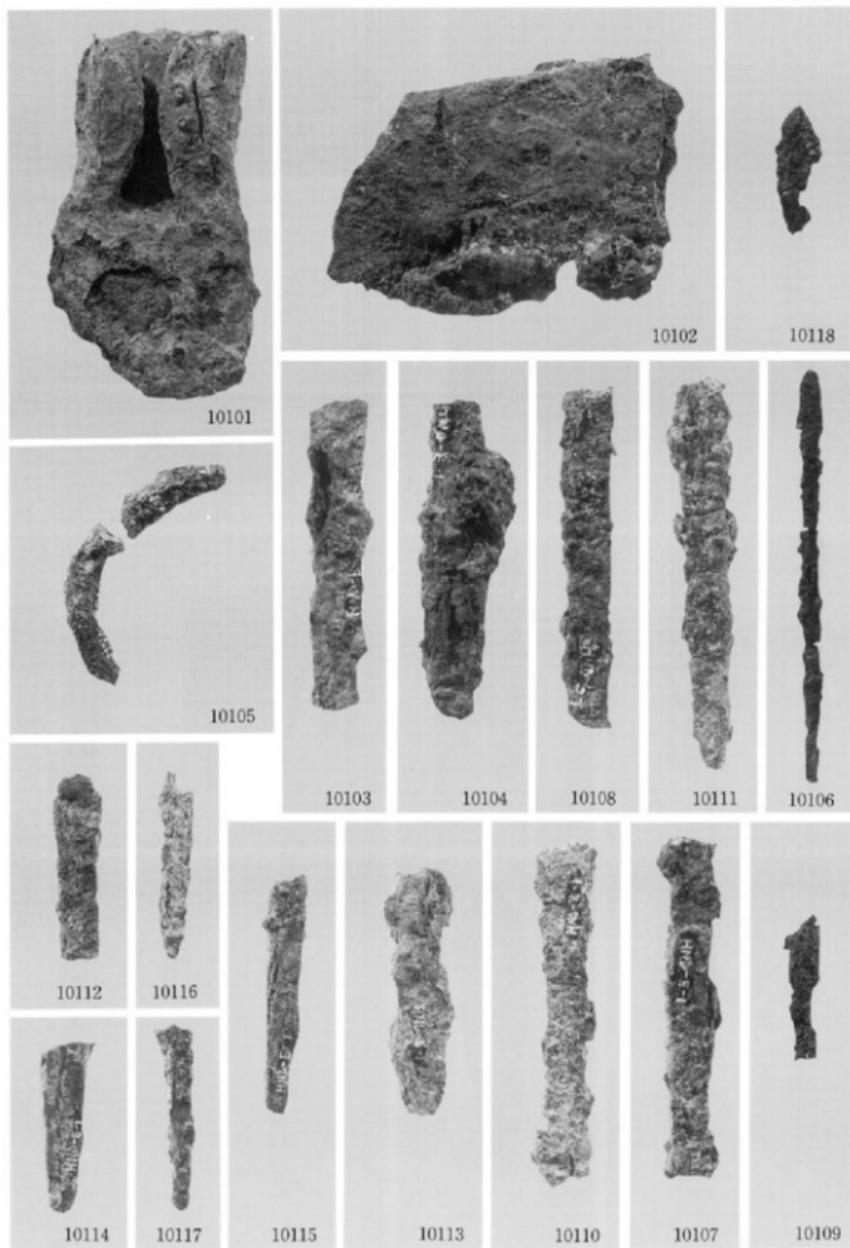
80035



80036



80040





20107



20101



20106



20105



20104



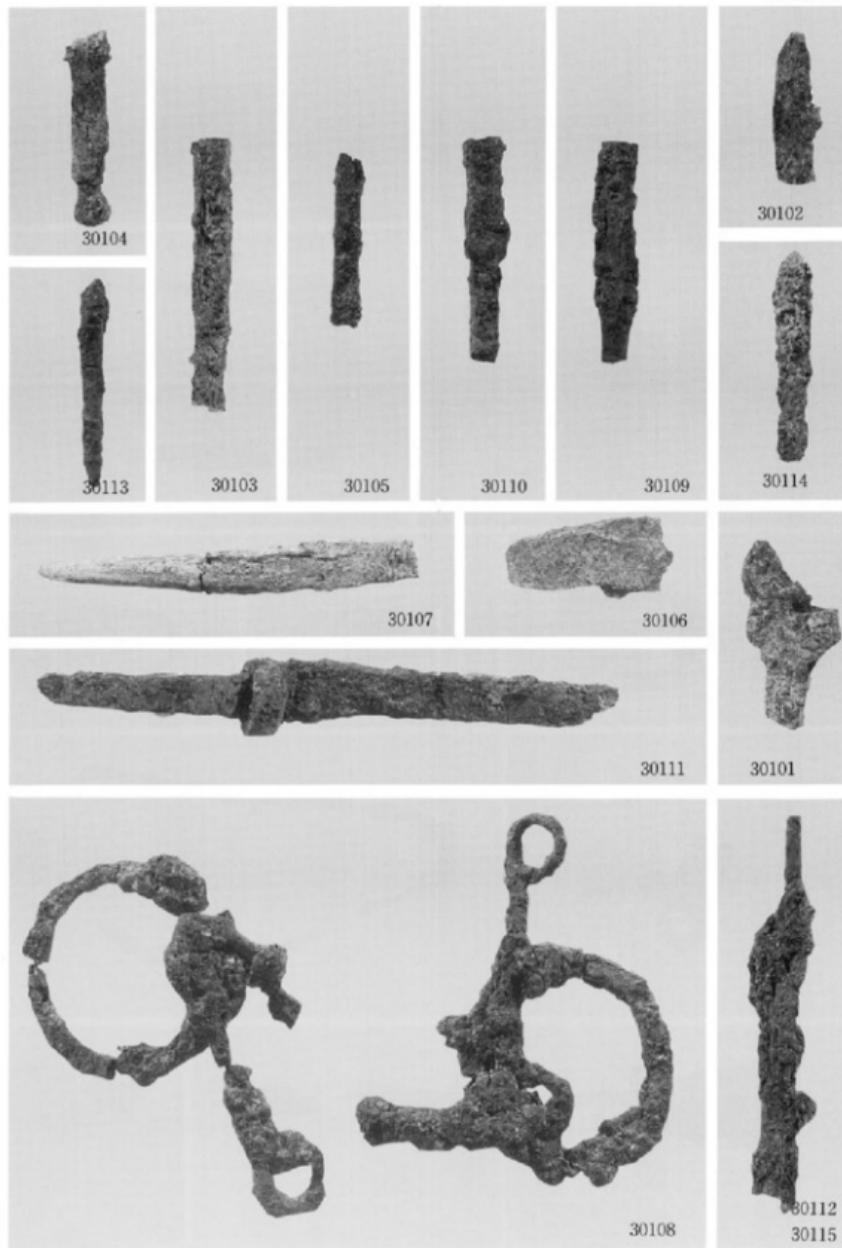
20102



50101



50102





80106



80107



80110



80101



80105



80109



80104



80108



80111



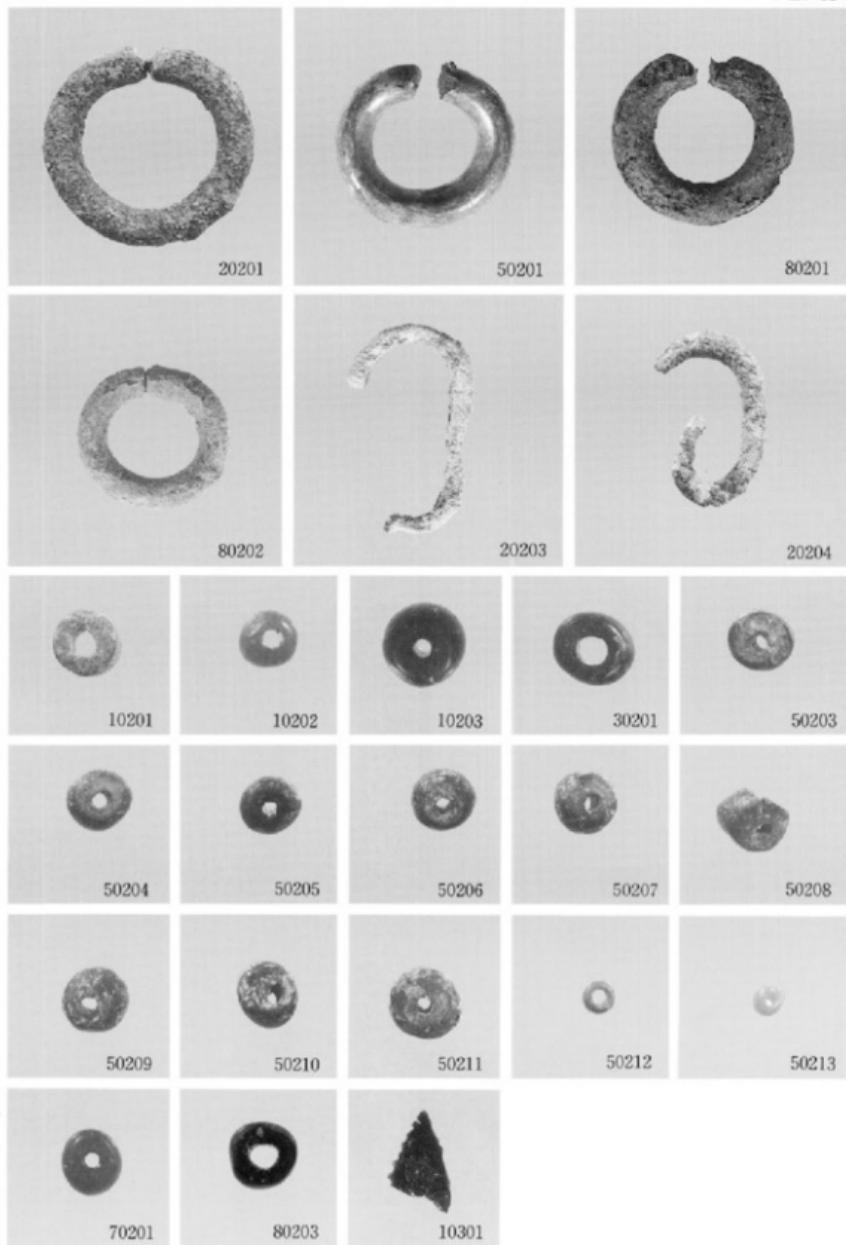
80103



80112



80102



羽根戸古墳群
—西区西部墓園建設にともなう調査(2)—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第198集

1989（平成元年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 祥文社印刷株式会社